

《多摩の書物と刷物 19世紀の出版・印刷文化》展の記録

一九九五年二月一日～二月三日

目次

開催にあたって	1
自鑄金属活字による蘭書の翻刻事業 日本近代印刷史の快挙	2
在村文化の興隆と印刷物	6
小山田与清の著作	9
旅と多摩案内	10
情報伝達としての刷物	12
府中の印刷屋さん、成文舎渡辺活版所 自己主張するメディアの誕生	16
滑稽作家の活躍 武蔵野叢誌の記者・投稿者の作品	18
小島家の出版活動	19
自由民権運動と刷物	21
八王子と青梅の印刷屋さん	23
八王子と青梅で刊行された雑誌	26
町田の本屋さんと印刷屋さん	27
武相銀行の印刷物	29
町田市内の銅版画	30
史料紹介	32

【開催にあたって】

開館五周年を迎えた中央図書館は、図書館にふさわしい記念展示として、「多摩の書物と刷物」展をおこなうこととしました。地元多摩の、それも一九世紀に限定して、著書の刊行や出版の事業、印刷技術発展への取り組み、日常を取り巻く広告・領収書・ちらし印刷の変遷などを、出版・印刷文化史の視点から展示構成いたします。

多摩では一九世紀の初頭から、上小山田村出身の国学者、小山田与清せいのの旺盛な執筆・出版活動が開始され、八王子の女性俳人榎本星布尼せいふの俳句集の編集・出版、関戸村延命寺の学僧春登しゅんとによる言語学・音声学の研究書の出版なども相次ぎます。学問的成果や知識・情報、文芸作品などが、書物の形で広く伝達されようになったのです。この時期は、学問・文芸・たしなみなどが、農村の知識層に幅広く受け入れられる頃で、かれらの著作出版もこの動向と軌を一にするもので

した。

この時期の印刷は、板に文字を彫り込む木版刷でしたが、一八五〇年代には金属活字による活版印刷の試みが始められ、多摩でも一八五七年（安政四）から翌年にかけて、自鑄の金属活字によるオランダ語本の翻刻がおこなわれました。湯浅方斎（青木芳斎）と秋山佐蔵の二人による、日本印刷史に残る快挙でした。

また明治時代に入り、一八八〇年代になると、府中の印刷所、成文舎が本格的な活版印刷による定期刊行雑誌『武蔵野叢誌』を発行します。人びとの社会参加が進み、政治論議が活発化し、漢詩・俳句・狂歌・狂句などの文芸がより広く普及したことを背景に、政治的・社会的議論の表現媒体の役割と、地域社会の情報誌、文芸誌的性格を合わせ持つメディアが多摩にも登場したのです。

これらの事例は、多摩の出版・印刷文化史を画するエポック・メイキングな事件でした。日本の出版・印刷史に特筆される事例を含めて、出版や印刷にあらわれた多摩の文化創造の力量を、この展示で明らかにしたいと思います。

【自鑄金属活字による蘭書の翻刻事業 日本近代印刷史の快挙】

多摩郡相原村（現町田市相原町）に回春堂医院を開業し、一八八九年（明治二二）に初代の堺村村長となった青木芳斎は、多摩郡新井村（現日野市）の出身で、旧姓は湯浅方斎といました。大坂の有名な蘭学塾、緒方洪庵の適塾で医学と洋学を学んだ俊才で、相原村の医師、青木得庵の養子となって青木姓を名乗ることになります。

その彼が、適塾を退塾して青木家に養子に入る直前の一八五七年（安政四）から翌五八年にかけて、八王子の千人同心で伊東玄朴の象先堂で学んだ秋山佐蔵とともに、金属活字を自分たちで鑄造し、オランダ語の辞書『クンストウオーデンブーク』（術語辞典）、兵書『シキートウーヘニング』、医学書『済生三方附医戒』など三点の原書翻刻を手がけました。芳斎が印刷技術を、佐蔵が資金調達をそれぞれ担当しての事業でした。

一八五〇年代は、日本の近代印刷史にとって黎明期で、長崎奉行所や蕃書調所などが金属活字による印刷技術の確立に向けて奮闘していましたが、民間でも意欲的な取り組みが始まっており、その代表が多摩の若き蘭学者であった芳斎・佐蔵のオランダ語本の翻刻出版だったのです。

1 「写真」『クンストウオーデンブーク』 一八五七年（安政四）一〇月 早稲田大学図書館

多摩郡新井村（現日野市）の湯浅方斎（青木芳斎）と八王子の千人同心秋山佐蔵（嵯蔵・磋三）が協力し、金属活字を自分たちで鑄造して出版した蘭書（オランダ語の書籍）です。方斎と佐蔵が最初に出版した活字印刷本で（一八五七＝安政四年一〇月には本ができませんでした）、ウエイランド著『クンストウオーデンブーク』（術語辞典）が正式の書名ですが、『ブーク』と略称

されます。三巻本のうちAからEまでの第一巻のみ刊行されました。

日本における金属活字本の出版は、一八五六～五八年頃のことでしたから、多摩の在野の蘭学者たちの自鑄活字本の発行は、金属活字印刷の最先端を切り開いていた快挙だったといえます。

2 『写真』裁断前の『クンストウオーデンブーク』 一八五七年一〇月 早稲田大学図書館

余白が多いままの刷り本状態（裁断前）で残された『ブーク』です。

3 『写真』『シキートワーヘニンゲ』 一八五八年五月 国立国会図書館（櫻井孝三氏提供）

『歩兵銃器、弾薬及射撃法』（歩兵のための銃器と弾薬）というほどの意味の兵書で、厚手の和紙に両面印刷され、それもばれん（馬連）による印刷ではなく、かなり大きな圧力をかけて印刷されていると推定されます。一八五八年（安政五）五月にはできあがっていたようですので、方斎らが発行した二冊目のオランダ語本となります。方斎らは当時『シキート』と略称していました。

4 『写真』『シキート』の試し刷り 一八五八年（安政五）五月 早稲田大学図書館

早稲田大学図書館所蔵の『済生三方附医戒』のなかにはさみこまれていたヤレ紙（印刷物のきずもの）で、『シキートワーヘニンゲ』の五五ページと五六ページです。

5 『済生三方附医戒』 一八五八年（安政五）七月 八王子市郷土資料館

多摩郡新井村（現日野市）の湯浅方斎（青木芳斎）と八王子の千人同心秋山佐蔵（嵯蔵・磋三）が協力し、金属活字を自ら鑄造して一八五八年（安政五）陰暦七月に出版した蘭書（オランダ語の書籍）です。もともとは、ドイツの医師・フーフェランドが著わした著名な医学書で、日本でもいくつかの訳本や蘭文の複製版ができていますが、方斎らはオランダ語に翻訳された本を自鑄活字によって翻刻することに成功したのです。しかし、二人の自鑄活字による蘭書翻刻は、これが最初ではありませんでした。すでに、一八五七年（安政四）一〇月には『ブーク』、五八年五月前後には『シキート』（書名は共に略称）を出版していました。

6 『複写』『済生三方附医戒』の奥付 一八五八年（安政五）七月 八王子市郷土資料館

安政五年に「A.J. HOZA.」が印刷した、という意味です。出版の総括責任者は、秋山佐蔵（方斎の師である義方の息子で、方斎の兄弟子にあたる）でしたが、印刷の責任担当者は方斎でした。「A」は「秋山」のオランダ語表記「Akiama」の略で、方斎は一時秋山姓を名乗っていたようです。

7 『済生三方附医戒』の表紙と本の包装袋 一八五八年（安政五）七月 八王子市郷土資料館

包装の袋には、「安政戊午孟秋（一八五八）安政五年陰暦七月（鏤行）武多西 学半堂蔵版」とあります。学半堂とは、秋山家がおこなっていた書籍版元の堂号です。この史料は八王子の秋山家の火災の際、かるうじて焼失を免れ、子孫に受け継がれてきたものです。

8 『写真』湯浅方斎（青木芳斎）らが作製した活字母型 早稲田大学図書館

湯浅方斎・秋山佐蔵の学半堂版の蘭書翻刻に使われた母型二個が、残されています。素材は電気銅です。一つは片面にR、反対面にQ、もう一つのほうは片面に小文字のbとm、反対面にhとt、それにIが打ち込んであります。父型を押しあてて打ち込んだ「パンチ母型」で、父型は外周辺にきちんと角がついており、技術的に優れたものと言われています。

9 「西洋活板諸用覚帳」 一八五七年（安政四）一月 八王子市郷土資料館

秋山佐蔵がつけていた、『ブーク』『シキート』『濟生三方附医戒』の出版に関わる覚帳（メモ）です。紙の購入、綴じ賃、仕立て代、販売代金の受取など、出版に関わる事情がこの史料から判明します。「32頁以下に全文史料紹介した。」

10 湯浅方斎(青木芳齋)宛の秋山磋三(佐蔵)書簡 一八五七年(安政四)一月三日

回春堂文庫(市川市・青木晃家文書)(寄託)

“ 鑄込文字はいつ頃出来上がりですか ” とあります。

一八五七年(安政四)一月三日付の、湯浅方斎(青木芳齋)あての秋山磋三(佐蔵)書簡です。方斎の帰郷(大坂適塾からの帰郷を意味するのかわ?)をきっかけに青木得庵家への養子の話が進んでいる様子とともに、「鑄込文字出来之日限、尚又植立始頃者幾日頃二相成候哉、其内模様御申越可被下候」とあり、佐蔵が方斎に活字鑄造の進行具合と、植字がいつ始まるかを尋ねています。この書簡によって、方斎が印刷人として活字鑄造から印刷にいたる技術部門を担当していたことが明確にわかりました。

11 「明治十七甲申年貸金利足帳」 一八五七年(安政四)一〇月 小野路町・小島資料館

出版費の捻出? 秋山義方(佐蔵)の借金。南多摩郡小野路村(現町田市)の小島守政がつけていた「明治十七甲申年貸金利足帳」によれば、秋山義方(佐蔵)は一八五七年(安政四)八月に、小島家から一〇両を借り入れています。『ブーク』の製本が完成するのは、一〇月ですから、ちょうどその直前ということになり、巨額な出版費用の一部にあてられたのではないかと推測されますし、佐蔵が資金調達にあたっていたことも確認されます。「史料紹介欄の五五頁以下に、貸金利足帳の関係部分を紹介した。」

12 「小島日記(明治十八年乙酉日記)」 一八八五年(明治一八)八月 小野路町・小島資料館

小島家からの借金の行方。小野路村の小島守政は、一八八五年八月一九日、佐蔵の息子の訪問を受け、病床にある佐蔵(当時七〇歳)を訪ねます。佐蔵は五両三分余りの未返済金が気になっていたのです。守政は、佐蔵の願いを入れて「希世之珍本」と評された『漢魏叢書』八帙桐箱入を引き取り、借金を帳消しにしました。「関係部分を39頁以下に紹介した。」

13 『中外医事新報』掲載の手記 一九四〇年(昭和一五)一一月 八王子市郷土資料館

秋山佐蔵の息子の練造が『中外医事新報』(一九四〇年一一月)に発表した、「安政五年父の翻刻せる蘭書『濟生三方附医戒』に就て」です。練造が父の佐蔵から聞いた思い出話や資料からまとめたもので、この手記が多摩の印刷史の快挙を後世に伝える出発点となりました。

14 青木芳齋の履歴書 一八八九年(明治二二)五月二〇日 小山町・杉山寿一家(寄贈)

芳斎が堺村の村長に就任するにあたって県に提出した履歴書です(一八八九「明治二二年五月二〇日付)。八王子の秋山義方に漢学と医学を学んだ後、「嘉永五年九月ヨリ撰津国大阪二於テ内科医緒方洪庵二從ヒ、安政五年九月迄六年一ヶ月間内外科医術及ヒ洋学研究」とあり、その後堺村相原の地で内外科医術を開業している、とあります。ただし、「適々齋塾姓名録」によれば、入門は、「嘉永六癸十二月」(一八五三年)であり、さらに新発見の秋山佐蔵の方斎宛書簡によれば、少なくとも一八五七年(安政四)一〇月には江戸近辺に戻っていたことが確認されますので、記

載ミスがあるようです。「方齋」を「芳齋」と改めるのは、青木得庵の娘ヤスと結婚して青木姓を名乗るようになってからでした。「履歴書全文を40頁以下に紹介した。」

15 「写真」青木芳齋肖像写真 『晩香園記念句集』より

天保三年一〇月一四日（一八三二年一月六日）～一九〇五年（明治三八）二月七日。

16 回春堂の領収書 一八九一年(明治二四)二月二七日

相原町・青木買家

青木芳齋が開いた医院「回春堂」の領収書。

湯浅方齋は、『濟世三方附医戒』を発行した年（一八五八年）に、相原村の医師、青木得庵の長女ヤスと結婚し、青木芳齋を名乗るようになりますが、この年の一月には医院（「回春堂」）を開業していたようです。

青木買家には、得庵・芳齋家の本家筋にあたる青木正太郎にあてた木版刷りの領収書（葉代）が残っています。ただ、印面は青木純造（芳齋息子）とありますので、息子がすでに治療に当たっていたようで、芳齋は堺村村長としての仕事に追われていたのかもしれない。

17 『晩香園記念句集』 一九〇七年(明治四〇)一月三〇日

小野路町・小島資料館

内扉には、「故晩香園青木芳齋先生一週年紀念俳句集」との標題があります。

青木芳齋（晩香は俳号）の一週忌にあわせて広く俳句が募集されるとともに、回春堂で追福の句会が開かれました。芳齋の肖像写真や、回春堂庭内の晩香園菊花壇で菊の手入れをする芳齋の写真を載せ、碑文と、句会や募集した句を冊子にまとめて刊行したのは、一九〇七年（明治四〇）一月三〇日のことでした。

18 「写真」青木芳齋の葬儀写真 一九〇五年(明治三八)二月

相原町・青木買家

一九〇五年（明治三八）二月七日に亡くなった芳齋の葬儀に際しての写真です。いたみがひどいのが、残念です。幟には「送青木芳齋君之英魂」「故青木芳齋之柩」とあり、中心には御輿型の柩が置かれ、遺族が前に座っています。周囲を紋付袴の男、白い和服の女性が囲み、家の軒下には大ぶりの菊が置かれています。

19 「写真」青木芳齋の墓 相原町・青木家墓地

自鑄金属活字による蘭書出版ばかりでなく、種痘の普及に尽力したことも碑面にみられます。芳齋は、多摩郡新井村（現日野市）の平弥兵衛の次男で、相原村の医師・青木得庵の娘ヤスと結婚しました。一九〇五年（明治三八）二月七日没、戒名は鶴翁院秀逸芳齋居士。

20 「写真」晩香青木翁の碑 一九〇六年(明治三九)二月建立 相原町・青木家墓地

青木芳齋は一八三二年（天保三）一〇月一四日、新井村の平（湯浅）氏に生まれ、『濟世三方附医戒』の出版を完成させた一八五八年秋以降に青木得庵の養子となり、相原村に医院を開業しました。一九〇五年（明治三八）二月七日に没しますが、一周忌の翌〇六年二月には青木一族の墓地の一角に大きな碑が建立されました。

21 青木純造著『熱海鉱泉誌』 一八九〇年(明治二三)六月一三日

小野路町・小島資料館

『熱海鉱泉誌 一名温泉浴海水浴独案内』とあるように、温泉の効能などを含む、旅行案内記です。青木純造纂述。発兌元は、朝香屋書店。

青木純造は堺村相原(現町田市)の人。蘭書の翻刻者で回春堂医院の創設者である芳齋の長男です。堺村村長になった芳齋のあとを受けて、回春堂を切り盛りしていました。純造にはこのほか、『日本薬局方備考』『新薬纂論』などの著書もあります(ともに共著)。

22 大鳥圭介『築城典刑』 一八六四年(元治元)六月刊(再版)

小野路町・小島資料館

邦文金属活字による書物。参考出品。本木昌造とともに活字印刷史に名を残す大鳥圭介が、翻訳出版した築城書『築城典刑』です。大鳥は一八六〇年(万延元)に、錫製の邦文活字の製造に成功し、この本を出版しました。最も初期の邦文活字印刷本の一点です(展示本は、四年後発行の再版本です)。木活字本と同様、木枠で活字を束ねたのでしよう、枠の角があいています。木版刷りでは、四隅があくことはありません。

【在村文化の興隆と印刷物】

多摩の印刷物を探して時代をさかのぼっていくと、一九世紀に入るところから急に書物の出版が目立ちはじめます。多摩や多摩出身の学者や俳人・詩人、作家、趣味人たちが、学問の成果や知識の研鑽、文芸の達成を、同好の士に知らせ、また広く社会一般に表現しようとして、出版活動に取り組み始めるのです。

八王子の女性俳人榎本(松原庵)星布は、一七九三年(寛政五)に『星布尼句集』を刊行して以後、亡くなる一八一四年(文化一)まで一〇冊近い句集を著しました。関戸村延命寺の学僧春登上人も、一八一七年(文化一四)に『仮字音便提要』を著し、その後も言語・音声学、歌学論の研究書を発行します。上山田村出身の国学者小山田与清が江戸で旺盛な著作活動をおこなって、出身地多摩の在村知識人に多大な影響をもたらすのも、ちょうどこの時期のことでした。

星布の活躍は多摩の俳諧史の嚆矢を飾るものでしたが、地域に俳諧を楽しむ農民達が広範に生まれ、そのネットワークが形成されていたからこそ可能でした。

かれらの著作活動は、国学・漢学・詩歌・俳諧・挿花などの学問・文芸・たしなみが農村の富裕層・知識人に幅広く受け入れられ、文化的活気があふれ出ようとしていた時代だからこそ、産み落とされたのだと考えることができそうです。

23 「復刻版」松原庵星布『春山集』 一八一一年(文化八年)

八王子市立中央図書館

「書林 東都本銀町二丁目須原屋善五郎刻」。木版刷り。

一八世紀から一九世紀の交に活躍した八王子の著名な女性俳人榎本星布(松原庵)の編輯した句集です。八〇歳の長寿を祝っての賀集として刊行されました。星布はすでに、一七九三年(寛政五)に『星布尼句集』を刊行し、その後も何冊かの句集の発行を手がけていますので、多摩でもっとも早い出版物による表現者ということになるでしょう。

24 春登上人の『万葉用字格』 一八一八年(文化一五)二月

小野路町・小島資料館

春登上人作、萬笈堂英遵蔵版。木版刷り。

多摩郡関戸村の延命寺の学僧春登（花水庵）の万葉集研究の成果です。万葉集の仮名遣いを五十音順に詳細に整理したもので、蔵版目録には、「万葉集の仮名遣いを知る重宝の書なり」とあります。

25 春登上人の『倭歌革運略図』 一八二五年(文政八)頃

小野路町・小島資料館

春登著、猿渡盛章・内藤重喬同校。木版刷り。

和歌の歴史を歌人と対書から時代区分して表にしたものです。

26 春登上人の『五十音摘要』 一八二九年(文政二)正月

小野路町・小島資料館

春登纂述。発兌書林は、京都勝村次右衛門・大坂田中太右衛門・江戸須原茂兵衛。木版刷り。

音声から日本語の性質を明らかにしようとした書です。本書の末尾には「花水庵著述目録」があり、『万葉用字格』『万葉名物考』『仮字音便提要』『百人一首余響』『富士山叢考』など一五点の書名があがっています。

27 嗜山楼(相沢伴主)編『允中插花鑑』 一八四一年(天保二)

多摩市・小山晶家

『允中流插花鑑』とも。木版刷り、書肆は求古堂松崎半造。序文は、上小山田村(現町田市)出身の小山田与清です。

允中流は、多摩郡関戸の狩野派の画家相沢五流の長男で、袁中郎流(宏道流)の插花を学んだ伴主(一七八六〜一八四九)が、一八二七年(文政一〇)に創始し、多摩の村役人層に広がった多摩独自の插花の流派です。『插花鑑』は、乾坤二冊に分かれ、乾には大意や心得、一月から四月までの花図、坤には五月から二月までの花図がそれぞれ描かれています。花図には、作成者の名前と作成日が入っています。

江戸の町人文化が堰を切ったように農村の富裕層に広がるのは、化政期といわれていますが、允中流の創始と広がりには、この時期の多摩の在地文化を代表する事例の一つです。ただ、允中流は、伴主の死後は残念ながら急速に衰えてしまいました。

28 川本衡山著『于役草』 一八五三年(嘉永六)仲夏

小野路町・小島資料館

川本貞輔(衡山)著、遠山雲如批、楽山堂蔵梓。木版刷り。

川本衡山は千人同心で、幕末の第一級漢詩人遠山雲如や大沼枕山などと交流する多摩の著名な詩人です。この著は、千人同心の役職である日光火番に出かけたさいの詩を集めたものです(于とは、主君に命じられて行くこと)。

漢詩は、地域によっては、俳諧以上に地方知識人の教養の核心的な位置にありました。

29 猿渡容盛の『中臣被詞』 一八五七年(安政四)正月

多摩市・太田伊三郎家

『中臣被詞 卜部家伝本校正改点』(写本)。「ナカトミノハラヒノコトバ」と振り仮名がついています。猿渡容盛(一八一一年生まれ)は、府中六所宮の神官で、多摩の国学者として著名です。『神代俚談』の著者盛章の息子、そして盛愛の父です。ほかに『類題新竹集』などの編集本があります。

30 太白堂系の句集『桃家春帖』(二点) 一八五八年(安政五)、一八六三年(文久三)

各地に散在する太白堂六世孤月の門人の句を集めた木版刷りの句集です。投稿数に合わせて入料を送り、掲載本を購入する仕組みです。孤月は一八二一年（文政四）に太白堂を嗣ぎ、三六〇〇人を越す門人を要する大流派に発展させ、太白堂中興の人物といわれます。南多摩郡東・南部には多くの門人がいたようです。

31猿渡容盛の『類題新竹集』 一八七一年(明治四)二月序文

小野路町・小島資料館

縦園猿渡大人輯、東京書肆玉巖堂発兌。木版刷り。

武蔵六所宮の神主、猿渡容盛（一八一一年生まれ）が、武州と相州の名の聞こえた歌人の歌をまとめたもので、一八六七年（慶応三）にすでに編集されましたが、刊行は四年後のことでした。五百名以上、二七〇〇首以上を収録しています。

32猿渡盛章著『神代俚談』 一八七四年(明治七)三月序文

小野路町・小島資料館

一八五三年（嘉永六）四月下浣執筆。孫猿渡盛愛・門人高木正年校訂。縦園蔵版。木版刷り。府中六所宮の神官、縦園猿渡盛章（一七九〇～一八六三）が執筆した神代史の稿本を、孫の盛愛が出版したものです。

盛章は息子の容盛とともに、小山田与清門下の国学者で、歌集として『縦の下草』が、旅日記に『山海日記』『なまよみの日記』『漫遊雜記』などがあります。

33森田友昇編『浅川集』 一八七九年(明治一二)

福生市郷土資料室

序文は平塚梅花、書は石阪昌孝、跋は俳諧の宗匠三森幹雄・女性画家奥原晴湖です。木版刷り。多摩郡福生村の森田友昇（一八三四～九四）が、松原庵四世を襲名した折りの披露の句集です。友昇の家は寺子屋「中福生大学」を開く地方知識人の家で、村の俳人福泉舎友甫に俳諧の手ほどきを受け、後に江戸の宗匠富所西馬について学びました。横浜開港直後に横浜へ移住し、一八七〇年（明治三）には友昇一座の句集『高むしろ』を刊行し、俳人としての名を確立しました。漢詩人大沼枕山・平塚梅花、画家奥原晴湖などと幅広い交流をもったことでも知られます。

34森田友昇著『横浜地名案内』 一八七五年(明治八)一二月一四日版權免許 福生市郷土資料室

嘯月庵友昇著（著述出版人森田友昇）。森田蔵版。木版刷り。

横浜八景の挿し絵に、著名な文人の発句や和歌、漢詩を配して紹介し、また横浜の文明開化の様子を、町を紹介する地名尽くしの形で、調子巧みな文章で綴っています。

35「複写写真」森田友昇画像

福生市郷土資料室提供

一八三四年（天保五）生まれ、一八九四年（明治二七）没。賛は天野佐一郎。日付は、一九五一年（昭和二六）一月二〇日。

36森素直編輯『修身俳諧不朽集』 一八八七年(明治二〇)六月

稲城市・森俊勇家

森白斎（桃仙とも）編輯、東京玉山堂発兌。木版刷り。

白斎森素直は、南多摩郡東長沼村（現稲城市）の人。一八六三年（文久三）の生まれと推定され、幼少の頃から俳諧に親しみ、耕桑の暇に宗匠孤月や太白堂に学び、明治期には「宗匠」の許しを得、しばしば選評などをおこなっていました。『俳諧不朽集』は、芭蕉や其角、一世太白堂桃隣、

六世太白堂孤月、一茶などの著名な俳人から無名の地方俳人まで四〇〇名以上の句を編輯したものです。

37 若林有信の『修身いろは訓』 一八九一年(明治二四)一二月印刷 常盤町・薄井梅子家編輯兼出版人若林有信(忠生村下小山田)。印刷人岸長吉(生田村生田)。木版刷り。

下小山田の若林有信(櫻溪)が、教育勅語の下賜されたことを喜び、いろはに託して道徳訓を述べ、小山田学校の生徒に配布した冊子です。有信は、明治初年に、学区取締として地域の教育に大きな役割を果たした人物です。

38 窪全亮著『古素堂詩鈔』 一八九四年(明治二七)三月 小野路町・小島資料館窪全亮(素堂)著。印刷は日本橋の東京製紙分社。活版。

序文は、溝口桂巖・大沼枕山・小菅癸一、跋は小島守政。窪全亮(一八四七年生まれ)は、南多摩郡稲城村東長沼(現稲城市)で私立学校「奚疑塾」(漢学塾)を開いていた(一八八〇年一〇月開設)大沼枕山門下の著名な漢学者で、漢詩の添削をおこなう漢詩人としても近在によく知られていました。

39 森清之助発行『冰筆』 一八九四年(明治二七)一二月 常盤町・薄井梅子家印刷は木版刷りで、印刷人は生田村生田の岸長吉です。

白斎森素直(桃仙とも)の長男清之助が、父の死を悼んで句を募集し出版した句集です(冰は氷のことです)。

40 富沢政賢編纂『松能友賀喜』 一八九五年(明治二八)七月三〇日 多摩市・佐伯邦昭家「松の友がき」と読みます。印刷人は、府中の渡辺活版所の渡辺寿彦です。部分的に木版が用いられていますが、和歌の部分は弘道軒清朝活字による活版印刷です。

富沢政賢は、多摩村連光寺(現多摩市)の名望家です。「吾が七十年と梅子が六十余り一年とを祝い、四方の風流士達よりほぎ歌あまた賜いける」とあるので、七〇歳の祝いの和歌集として刊行されたのでしょう。

【小山田与清の著作】

一九世紀前半の江戸で、平田篤胤・伴信友とともに「国学三大家」と称された小山田与清は、多摩郡上小山田村(現町田市)の田中氏の出身でした。江戸で国学を学び、一八四七年(文化三三)、二一歳の時に神田川のほとり、見沼通船方の高田家に養子に入り、しだいに学者・文人との親交を深め、和学の基礎研究(類書・考証の学)に大きな足跡を残すと同時に、五万巻にわたる蔵書家としても著名でした。

考証の書や随筆、紀行文など、多くの著作や稿本を残し、また門弟数百ともいわれ、多摩の在村知識人・文人にも大きな影響を与えました。挿花允中流の創始者、一ノ宮村の相沢伴主(多摩市)、府中六所宮の神官猿渡盛章・容盛父子(府中市)、小野路村の小島政敏(町田市)などとの

交流（あるいは師弟関係）はよく知られています。

41 『松屋棟梁集 初編』 一八一六年(文化二三)仲冬

下小山田町・若林照雄家 小野路町・小島資料館

擁書倉高田先生（小山田与清^{とせきよ}）著。木版刷り。

与清の二番目の考証隨筆集です。「猿渡盛章に寄する書」や、「隅田河の名義」「武蔵坊弁慶」「富士山の名義」「甲陽軍艦の沙汰」「小山田の関」「小山田氏が城蹟」「小山田領」などの考証が収録されています。与清の代表作の一つです。

42 『高幡不動尊縁起』 一八一七年(文化二四)二月

下小山田町・若林照雄家

高田与清撰、高畑村別当金剛寺発行。木版刷り。

高幡不動（現日野市）で頒布された縁起です。「安政七申年正月廿八日若林氏参詣」とあり、参詣のさい買い求めたことがわかります。

43 『墓相小言』 一八二〇年(文政三)一〇月

下小山田町・若林照雄家

松屋高田先生説、藤原好秋・赤松知則抄略。木版刷り、江戸書林千鍾房発行。

著作目録には、「墓相或問の大概を門人藤原好秋大人、赤松知則大人の抄略せられしなり」とあります。

44 『鹿島日記』 一八二二年(文政五)

小野路町・小島資料館

高田与清稿。東都耕文堂製本。木版刷り。

下総取手、神崎、佐原、香取、鹿島、銚子、さらに八日市場、成田などを巡ったさいの紀行です。

【旅と多摩案内】

江戸時代の庶民の旅は、社寺参詣^{さんけい}や湯治^{とうじ}を目的とすることが一般的でした。旦那寺^{だんなでら}や名主が発行した道中手形^{みちてがた}を持参しなければなりませんでしたが、村を遠く離れる旅が自由にできたわけではありません。しかし、伊勢参宮^{いせさんくわ}や札所巡り^{ふだしょめぐり}など、有名な社寺への参詣や、招福除災^{しよくくじよめい}をもたらす霊地への代参講を組織しての旅は、道中日記などが数多く残されていることでもわかるように、意外なほど頻繁^{ひんぱん}でした。旅は、しだいに物見遊山^{ものみゆうざん}の性格を強めながら、庶民の大きな娯楽の典型へと発展していくのです。

旅の広がり、地図や旅案内（宿泊施設や名所の紹介）の需要を呼び起こし、また『東海道中膝栗毛^{ひざくりげ}』に代表される旅ものの滑稽本を広く普及させます。

多摩には全国から人を呼び集める観光地は見あたりませんが、霊山としての高尾山や御嶽山、江戸町人の手頃な旅行先としての小金井の桜や多摩川の鮎は有名でしたから、小金井の桜を華やかに描いた錦絵や観桜紀行文などが刊行され、また甲州道中を題材にした膝栗毛なども相次いで出版されました。八王子出身の戯作家麻川眉山の『道草日記腕枕^{みちくさ日記うでまくら}』も膝栗毛もの一つです。『武

蔵国多摩郡御嶽山道中記御嶽菅笠』などは、御嶽山側からの参詣者獲得のための青梅街道道中記で、多摩の側からの情報発信の事例として貴重です。

45 麻川眉山の『道草日記 腕枕』 一八二二年(文政四) 新藤恵久氏(八王子市郷土資料館寄託) 板元文寿堂。木版刷り。

『道草日記 腕枕』の上・中・下之巻。八王子出身の戯作者、麻川眉山が著した、甲州街道を舞台にした膝栗毛本。高尾山、さらには甲州身延山や富士浅間社の参詣を題材にした道中記は、十返舎一九・仮名垣魯文などの著名作家も手がけていますが、眉山は地元出身者らしく八王子周辺を詳しく記述しています。

46 「写真」『桑都日記』 文政期から天保期に編集

八王子市郷土資料館

八王子の千人同心、塩野適斎(一七七五～一八四七)が、文政期から天保期にかけてまとめた桑都(江戸時代には八王子を桑の都、桑都と呼びました)の地誌書です。八王子地方の歴史研究の第一級資料です。残念ながら出版には至りませんでした。

47 「複写」『武蔵国多摩郡御嶽山道中記 御嶽菅笠』 一八三四年(天保五)

復刻版より。御嶽山の神官靴矢市正が版元で、斎藤義彦が製作した、御嶽山参詣のための木版刷りの道中案内記です。

御嶽山信仰を広めるために、御嶽山の御師が道中記を自ら作成したもので、多摩の出版史の中でも貴重です。靴矢家の講中には江戸の商人層が多く、江戸の文人とのつながりも強かったと推測され、それが道中記出版の背景と考えられています。

48 「武蔵国南多摩郡百草村百草園全図」 一八八八年(明治二)二月三日出版

稲城市・森俊勇家(稲城市教育委員会保管)

印刷・製版は「東京精工組」とあります。版は、銅版と推測されます。南多摩郡百草村(現日野市)の百草園は、百草村出身の横浜生糸商人、青木角蔵が、松連寺跡を買って庭園にしたものです。開園は一八八七年(明治二〇)四月ですから、たいへん新しい観光地といえます。

49 「写真」錦絵「蒸気車往復繁栄之図」 一八八九年(明治二)四月一〇日

JR東日本旅客会社新宿駅提供

甲武鉄道(現在の中央線)が立川 新宿間に開通したのは、一八八九年(明治二)四月一日で、八月一日には八王子まで延長されました。

錦絵は、開業案内ポスターとして作成されたもので、東京在住者に多摩の観光案内をするという構図になっています。小金井の桜、玉川(多摩川)、高尾山は説明入りで詳しく紹介されています。

50 「大塚山道了堂境内之図」 一八九三年(明治二六)五月印刷

八王子市郷土資料館(野口正久氏旧蔵)

「武蔵国南多摩郡由木村鑪水大塚山道了堂境内之図」。由木村鑪水(現八王子市)の尼僧浅井貞心が、八王子横山の八王子尚文館(小川徳治郎創業)に刷らせた石版の境内図です。尚文館の印刷

物としては、収集した限りでは、最も古いものです。

道了堂は八王子と横浜を結ぶメイン街道神奈川道（いわゆる絹の道）の鐘水峠にあるお堂で、鐘水の生糸商人の庇護を受けて栄えました。現在はお堂も崩れ落ちて見る影もありませんが、鐘水商人の栄華をこの石版画はよく伝えていきます。

51 『武蔵国御嶽山全図』 一八九六年(明治二九)七月一〇日

稲城市・森俊勇家(稲城市教育委員会保管)

画作兼発行者井上茂兵衛(日本橋)、発売人須崎弥三郎(西多摩郡三田村御嶽山)。

明治二〇年代頃からと思われるが、各地の有名な神社・仏閣、観光地・温泉場などは、競って銅版・石版の案内図を発行します。参詣記念、観光土産として売りに出されたのでしようが、特に参詣者は講中の代表者であるため、案内図の需要は大きかったようです。

52 「複写・写真」『風俗画報』増刊号の「小金井名所図会」 一九〇六年(明治三九)三月

横浜開港資料館 小平市中央図書館提供

明治時代の庶民生活の絵を豊富に伝える『風俗画報』の、小金井桜の特集号です。表紙は甲武鉄道国分寺駅の雑踏、綴じ込み絵は桜見物でにぎわう小金井橋です。

小金井の桜が、江戸庶民の行楽地として有名になるのは、一九世紀に入る頃(享和年間)で、名所案内ものも数多く出版されました。

53 『武蔵名勝図会』

図師町・佐藤正心家

植田孟縉編輯、佐藤後素模写。稿本のままで、出版はされませんでした。

孟縉植田十兵衛(一七五七～一八三四)は、八王子千人同心の組頭で、一八一三年(文化一〇)に『新篇武蔵風土記稿』の編纂を命じられ多摩や秩父郡の地誌を探索し、晩年に至るまでその編纂にあたりました。その間、一八二三年(文政六)一〇月には『武蔵名勝図会』を撰し、さらに『鎌倉攬勝記』『日光山志』などを著しています。

54 『江戸名所図会』十卷之三 一八三四年(天保五)

小野路町・小島資料館

【情報伝達としての刷物】

刷物はそもそも、複数の関係者や同好の士、あるいは不特定多数の人々への情報伝達・販売に利用して威力を発揮します。多摩の旧家の土蔵の中からは、木版刷りの絵・文字で、幕末期の政治の混乱や社会の動きを知らせる錦絵・瓦板と称される刷物をたくさん見いだすことができます。刷物を写し取った覚書帳(異聞録^{いぶんろく})も各家に残されていますから、情報流通手段としての刷物の広がりわかりますし、どんな情報収集意欲をもった人々の存在を見て取ることも可能です。

ただ、多摩の住人が刷物によって政治・社会情報を発信するという事例は、確認できません。手紙による情報伝達が、地域ネットワークの中を書き写す事によって流通する事例はありますが、

印刷物によってニューズを多方面に発信する事は、明治一〇年代を待たなければなりません。

とはいえ、俳句の投稿呼びかけや句会開催の通知などには、早くから木版刷りの刷物が使われていました。商店、売薬の広告ちらし、薬の包み紙などにも、刷物が多く使われていて、庶民が接する刷物の代表となっていました。病は人々に降りかかる災厄さいやくの代表的なものでしたから、医療・売薬関係のちらしは貴重な生活情報だったのでしょう。資料が多く残されているのも、うなずけることです。

55 小野路の薬種萩原氏の家伝薬効能書 江戸時代

常盤町・薄井梅子家

多摩郡小野路村（現町田市）の薬舗、萩生田勘左衛門が調製して販売していた「湿皮癬しつひせんこせかさ蒸薬むしくすり」の木版刷り効能書きです。薬の包み紙として使用されたのでしょう。多摩郡長沼村（現稲城市）には、萩生田善一から薬品取り扱いの修行を受けた薬種商がいましたから、近在に知られた薬屋さんだったのでしょうか。

56 八王子舛田屋の引札曆 一八六八年（慶応四）

図師町・佐藤正心家

「慶応四戊辰略曆じゅげくれき」。商店や薬舗（薬屋さん）の引札ひきふだ（広告ちらし）でよく使われるのは、「略歴」を配した木版刷物でしょう。京都大仏前の松寿堂が調合する「御免・御用薬 人参五臓円」を中央に配していますので、松寿堂が作成した略歴を売払人（小売店）舛田屋が名前を入れてお得意に配ったのでしょうか。舛田屋は、薬の販売とともに「入歯」をはじめ、「口中一切」の治療をおこない、また「万種物よろずもの」の販売をおこなっていたことがわかります。

57 八王子舛田屋の薬の効能書き 明治期

相原町・青木買家

「慶応四戊辰略歴」で紹介しましたが、慶応年間に京都にあつた松寿堂は本店を飯能に移したのが、明治期には飯能で腎薬「人参五臓円」を調合していました。八王子寺町の出店「舛田屋松五郎」は、同様に売り拡め所になっていたようで、木版刷りの「五臓円効能」が残っています。

58 寿仙堂医院の開院広告 一八八九年（明治二）九月

つくし野・山下憲治家〔寄贈〕

八王子駅八日町に開業した医院の活版刷り開業ちらし（印刷所不明）。明治二〇年代にはいると、活版刷りのちらしが急激に増え始めます。

59 武州小山田若林綿店の広告 一八五三年（嘉永六）

下小山田町・若林宏宣家

多摩郡下小山田村（現町田市）の若林有信が開いていた綿店の木版刷り広告です。「綿店普請諸掛里扣帳 癸丑 嘉永六年八月吉日」の裏表紙に刷られています。若林有信家は、一八五三年（嘉永六）八月、綿店の新築に取りかかり、翌年の四月に家見がおこなわれました。「綿類大安売」の木版は新築に取りかかるさいに作成されたようで、“来る寅年の早春に開店するので、相変わらず沢山ご用向きをお願いします”との口上が添えられています。「来寅早春開店仕候間不替沢山御用向奉願上候以上」。

若林家は、屋号をホンダナ（本店）といい、明治に入っても小山田で一番大きな織物・荒物の店を開いていました。

60 原町田の藤屋三次郎店の広告 明治初期か

つくし野・山下憲治家〔寄贈〕

腹掛・股引を誂えてつくる多摩郡原町田村（現町田市）の藤屋三次郎店の木版刷りの広告です。通例の広告ちらしとは違いますので、包み紙への刷り込みなのでしょうが。

61 武州原町下宿の藤屋商店の引札 明治後期以降 じくし野・山下憲治家〔寄贈〕
「謹賀新年」とあり、「呉服太物夜具蒲団」とあります。

62 台丸屋の開店夏物売り出し広告 明治一〇年代 じくし野・山下憲治家〔寄贈〕
南多摩郡大蔵村の呉服商台丸屋の、木版刷り開店売り出し広告です。欄外には、“原町田の程の日影側の紺屋前に出店します”との添え書きがあります。

63 南多摩郡図師村の河合半造店の明治二一年引札曆 一八八七年(明治二〇)一一月届 小野路町・小島資料館
編輯兼出版人は、東京日本橋区堀江町二丁目十番地、団扇問屋遠州屋巨市兵衛。
「呉服太物なら物類」「宿」とあります。

64 小山村の守屋瀧太郎店の明治二一年引札曆 一八八七年(明治二〇)一一月届 小野路町・小島資料館
日本橋区堀江町三丁目一バンチ、編輯兼出版人新井嘉兵衛。
「和洋織物荒物大安売」とあります。

65 武州府中駅武蔵屋長右衛門の明治二一年引札曆 一八八七年一月届 小野路町・小島資料館
日本橋区堀江町二丁目三番地、編輯兼出版人村川惣右衛門。
上部に七福神を配しています。武蔵屋は、万種物のお店です。

66 明治廿六年略曆 一八九二年(明治二五)一一月 小野路町・小島資料館
印刷兼発行者は、日本橋区馬喰町三丁目十番地小森宗次郎。

67 原町田の中久本店・支店の大正六年引札曆 一九一六年(大正五)一〇月 成瀬・村松貞枝家
編集発行は、大阪市西区の中井徳太郎。
巳を凶案化した宝船に七福神を載せた図柄で、「酒類味噌醤油酢質物商」とあります。

68 忠生村木曾の吉野屋商店の大正六年引札曆 一九一六年(大正五)一〇月 成瀬・村松貞枝家
編輯兼発行者は、大阪市西区の中井徳太郎。
「酒類販売所」とあります。

69 「複写」天皇行幸の祝詞 一八八一年(明治一四) 三鷹市・吉野泰平家
明治天皇が、兎狩りのために南多摩郡連光寺村（現多摩市）の獵場に行幸したさいの、長歌・短歌を集めた木版の刷物です。

70 大蔵村不動堂の永代奉額句合案内 明治一〇年代 当館購入史料
大蔵村の不淋庵寿月（市川姓）が中心となって開く奉額句合の木版彩色刷物さいしきです。

71 追福句合のお知らせ 一八八七年(明治二〇)一一月 常盤町・薄井梅子家
句合を知らせる活版刷りのちらしです。句合は、俳諧の発句を左右両組から一句ずつ出し合って判定する句合のことですが、参加者の句を宗匠が選定・批評していたようです。白斎は、この年に『修身俳諧不朽集』を編んだ東長沼村（稲城市）の森素直です。

72 和歌の募集案内 一八八八年(明治二一)

常盤町・薄井梅子家

「月次和歌儲題」。一八八八年の各月次会の課題テーマを知らせる木版刷りのちらしです。本文には、「編集して一巻とし秀逸を巻頭に置き、一名一首を採録して厚意を謝すので費用一〇銭を添えて申し込んでほしい」とあります。送り先、つまり会の主催者は、南多摩郡図師村(現町田市)の河合信張・清輔の二人です。河合清輔は、『武蔵野叢誌』への和歌投稿者の一人です。

73 句合・開巻の案内 明治二〇年代初め

常盤町・薄井梅子家

南多摩郡の東部と橘樹郡・都筑郡の西部の地域、つまり郡境域は、明治二〇年代以降に俳諧関係の刷物が多くなります。この地域でもすでに近世の化政期には村役人層に俳諧趣味が広がっていましたが、若者を巻き込む隆盛は青年会活動が活発化する明治中期のようです。太白堂系の宗匠を中心に定期的に句会が開かれ、また投稿募集と秀逸の句の出版がおこなわれました。

74 「複写」親睦小集の案内 明治一〇年代

三鷹市・吉野泰平家

書家や画家、漢詩人や句人などが作品を持ち寄り、あるいは即興の作品を展示販売する書画会は、江戸(東京)や横浜ばかりでなく多摩でもときおり開催されていました。多摩とは縁の深い大沼枕山や真下晩松、平塚梅花は常連でしたし、多摩の書家では吉野泰三(三鷹市)や本田定年(国立市)、本多雖軒(国分寺市)などが著名でした。この「親睦小集」は、その本田定年が関係した集まりの木版刷り案内です。書法の演説、諸先生の揮毫、展観、そして詩歌連俳(漢詩・和歌・俳諧)と盛りだくさんな会で、文人と文人志向の旦那衆のサロンとして、意味が大きかったでしょう。

75 「複写」六書展覧会の規則 一八九五年(明治二八)九月

三鷹市・吉野泰平家

北多摩郡谷保村(現国立市)の書家・自由民権家、そして武蔵野叢誌刊行の中心人物本田定年が、京都滞在中に関係した書画展覧会の規則です。

76 和算家小俣勇造の教学披露 明治一〇年代

稲城市・井西一郎家

和算は村役人の実務的な教養の一つとして重視され、名主経験者のお宅の所蔵本の中に和算書を見出すことがよくあります。神社の奉納額にも、俳諧や剣術とともに時折和算額を見つけることができます。近代初頭の多摩の和算家としては福田理軒の門人、寺方村(現多摩市)の伊野銀蔵や矢野口村(現稲城市)の小俣勇造が著名でしょう。小俣勇造の和算教授の木版刷りちらしが残されていて、学齡外(小学校卒業者)の生徒への教授内容がよくわかります。文字中心の木版刷りちらしは、明治一〇年代あたりが最後で、このころから活版のちらしが主流になるようです。

77 角力興行の案内状 江戸時代(七月)

多摩市・寺沢茂世家

多摩郡一ノ宮村(現多摩市)の鎮守の秋祭りにおこなう奉納角力興行の、木版刷り案内状。世話人に周辺の村が加わり、若者組の関与も確認されて興味深いのですが、書簡の形態をとった木版刷りの案内状になっていて、江戸時代(あるいは明治のごく初期の可能性もあり)のものとしては珍しいと考えられます。

【府中の印刷屋さん、成文舎渡辺活版所 自己主張するメディアの誕生】

府中八幡宿の神官の養嗣子だった渡辺寿彦が、一八七八年（明治一）四月に創業した印刷屋さん（成文舎・渡辺活版所）は、はじめは北多摩郡役所関係の印刷を手がけていました。しかし、自由民権運動が活発化し、郡役所関係者や知人達が演説会の開催に奔走し、民権結社の設立に向かいはじめ、さらには民権の普及につとめる東京のジャーナリストとの交流が深まる中、北多摩郡の民権運動の印刷物を手がけるようになります。民権運動の活発化が、情報伝達を効率化させる活版印刷の役割を拡大させたのです。

ただそれだけなら、印刷屋さんの民権運動への参加、ということですが、渡辺寿彦は成文舎出版の名で何冊かの書物を出版する一方、民権運動の同志や多摩へやってきた新進気鋭のジャーナリストと協力して、成文舎内に武蔵野叢誌社を設立し『武蔵野叢誌』を発行するなど、出版活動への意欲を見せていました。

『武蔵野叢誌』は、自由民権の主張を声高に主張するわけではありませんが、官令や雑報などの情報欄、漢詩、俳句、和歌、狂句、狂歌などの文芸欄を充実させると同時に、論説欄を設けて言論拡張の役割も確実に担っていました。民権運動の同志や漢詩・書画の同好的なグループの参加と支援によって維持されたこの雑誌は、自己主張する地域総合雑誌の先駆けとなったのです。

78 『武蔵野叢誌』 一八八三年(明治一六)一〇月七日創刊〜八四年一月三〇日終刊

小野路町・小島資料館 稲城市・鈴木買家

北多摩郡の比留間雄亮・本田定年（退庵）・木村新之助（華洲）の三人が発起人となり、編集は西森武城、持主兼印刷人は渡辺寿彦で発行された、多摩で最初の定期刊行雑誌です。新聞紙条例違反による処罰を受けて西森が退職する事件があり、また第二五号の「日東家伝勅命丸」広告は不敬罪に問われます。不敬罪事件は、廃刊の直接の契機となります。

79 『小学初等六級修身口授題言』 一八八三年二月 府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

府中中学校の教員の原田真一が著し、成文舎の渡辺寿彦が出版した木版刷りの修身教科書です。現在確認される限りでは、成文舎渡辺活版所が最初に出版した書物です。

80 「複写」『明治金玉集』の発行延期広告 一八八三年(明治一六)一〇月七日

『武蔵野叢誌』第一号より。木村新之助（華洲）は、本田定年・比留間雄亮とともに「武蔵野叢誌」創刊の発起人で、誌上に「華しう玉」の名で俳句・狂詩・都々逸などを載せています。そのかれが、著名な漢詩人の詩を集めた『明治金玉集』と題する漢詩集を成文舎出版（渡辺活版所）から刊行しようとしていたことが、この広告からわかります。「全文を41頁に収録した。」

81 『一滴千金憂世の涕淚』 一八八四年三月 府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

エドワード・キング著『ジエントル・サヴェージ』を、政治小説家宮崎夢柳が抄訳して「絵入自由新聞」に連載した「一滴千金憂世の涕淚」を、渡辺寿彦が「成文舎蔵版」で三分冊にして出版

したものです。『武蔵野叢誌』と同様、弘道軒清朝文字こうどうけんせいちゆうが使われています。原書は、アメリカ青年がヨーロッパを舞台に活躍する政治革命小説で、自由党総理板垣退助がヨーロッパから持ち帰ったものといわれます。宮崎夢柳（一八五五～八九）は、土佐出身の民権派ジャーナリストで、『自由の凱歌』、『魯西国虚無党冤柱鞭台』、『虚無党実伝記鬼啾啾』などの翻訳政治小説があります。

82 『一滴千金憂浮世の涕淚』の新聞広告 一八八四年(明治一七)四月五日

復刻版『自由新聞』より。成文舎渡辺活版所が発行した、宮崎夢柳の翻訳政治小説の新聞掲載広告です。（広告の全文を41頁以下に史料紹介した。）

83 「複写」渡辺活版所の名入り刷物 一八九三年(明治二六)一月 東大和市・内野秀治家

一月九日に、北多摩郡府中町の称名寺で開かれる「大日本協会演説会」の「公告」です。今回の展示では、渡辺活版所の名が入った唯一の刷物（一枚物）です。活字は、弘道軒清朝活字です。

84 渡辺活版所印刷の刷物 一八八七年(明治二〇)二月 金井町・草薙佐市家(寄託)

渡辺活版所の名が入った大日本協会の演説会公告と同じ飾り枠を使い、活字も弘道軒清朝活字です。やはり成文舎渡辺活版所の刷物でしょう。

85 渡辺活版所が印刷した刷物 明治一〇年代から二〇年代 常盤町・薄井梅子家

金井町・草薙佐市家(寄託) 三鷹市・吉野泰平家 東大和市・内野秀治家

弘道軒清朝活字せいちゆうを使用した多摩の印刷所は、渡辺活版所だけと考えられ、ここに紹介した刷物は皆、渡辺活版所製と考えて間違いないでしょう。

「複写」大政談演説会経費決算書 一八八二年(明治一五)八月九日 吉野泰平家

「複写」第貳回北多摩郡有志懇親会々席人名 明治一〇年代中頃 吉野泰平家

南多摩郡私立教育会幹事よりの講話会案内 一八八七年(明治一〇)二月 草薙佐市家

私立南多摩郡農工会総会の案内 一八八八年(明治二一)二月一日 薄井梅子家

「複写」北多摩郡正義派規約 一八八九年(明治二二)九月 内野秀治家・吉野泰平家

大角力句合(谷保連・本宿連) 一八八九年(明治二二)二月 薄井梅子家

「複写」神奈川県第三撰挙区同感者慰勞会幹事よりの口演 一八九〇年(明治二三)七月一六

日 吉野泰平家

「複写」神奈川県実業者相談会々則 明治二〇年代前期 吉野泰平家

「複写」正義青年会々則 明治二〇年代中頃 吉野泰平家

86 「写真」成文舎の創立者・渡辺寿彦 当館

弘化三年八月一五日(一八四六年一〇月五日)～一九二三年(大正一二)九月七日。

寿彦ほそひこは、多摩郡押立村(現稲城市)の川崎家の出身。府中六所宮の社僧、渡辺校男あおの養嗣子となり、一八七八年(明治一一)四月に成文舎渡辺活版所を設立し、印刷業をおこなうかたわら出版雑誌『武蔵野叢誌』の刊行、新聞売り捌きなどを手がけました。北多摩郡役所の吏員や、北多摩郡民権運動の関係者と親しく、北多摩郡の行政関係、民権運動関係の印刷を一手に請け負っていた感があります。

弘道軒清朝活字を使用した独特の古典的雰囲気を持った印刷物の多くは、渡辺活版所の印刷と考

えられます。

87 「写真」アルビヨン型手引印刷機 明治一〇年頃作製

府中市郷土の森博物館

成文舎渡辺活版所が使用した活版印刷機です。日本最初の印刷機メーカー平野活版所が製造した機械と推定されます。『武蔵野叢誌』や『一滴千金憂世の涕淚』^{なみた}など、成文舎の後世に残る出版事業は、この印刷機から生まれました。

88 版木「吉野豊次郎演説会」 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

89 版木「改良精選 蚕種」 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

90 版木「保命丹」 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

北多摩郡多磨村押立(府中市)の川崎平左衛門家の調剤薬「保命丹」の版木です。ただ、金属の版を板に張り付けたもので、だいぶ時代は下るようです。

91 版木「妙見寺の九曜表」 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

武州百村(現稲城市)の妙見寺は、星供祭で有名で、冬至の日の賑わいはたいそうなものでした。

92 渡辺印刷所の紙型 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

活字から直接刷る方式は、枚数に限度があるため、紙型が使われるようになります。特殊な紙を組み版に当て、力を加えて凹版型を取ったものが紙型で、これに印刷鉛を溶かして鑄込み、印刷用の鉛版をつくって印刷します。渡辺印刷所が紙型を使い始めるのは、ずっと後のことです。

93 渡辺印刷所使用の亜鉛版 年代不明

府中市郷土の森博物館(渡辺紀彦氏旧蔵)

近藤勇書簡の原版です。油と水の反発を利用して印刷する平版印刷は、まず石版印刷から始まりますが、明治三〇年代にはアルミ版、大正期には亜鉛(ジंक)版が広まります。渡辺印刷所に残るこの版は、ジंक版と推定されます。

94 「複写」『武蔵文庫 百家明覧』 一九一〇年(明治四三)四月

小野路町・小島資料館

多摩四郡の名士録として刊行されたもので、北多摩郡府中町の美術家の項には、「美術石版活版印刷所 渡辺愛彦」の名があります。

【滑稽作家の活躍 武蔵野叢誌の記者・投稿者の作品】

95 「複写」挿画に見る骨皮道人 一八八七年(明治二〇)一二月刊『寓意諷諫当世滑稽文章』掲載

復刻版『武蔵野叢誌』より。瘦々亭骨皮道人こと西森武城は、『武蔵野叢誌』創刊時の編集人です。

伊予松山の出身で、朝野新聞・東京新誌・東京新誌・^{まろまる}団々珍聞の記者を経て武蔵野叢誌の編集を担当し、滑稽・諷刺調の傾向を随所に散りばめました。が、「笑門福来出放題広告」が新聞紙条例に触れ、第十号までで編集人を降りました。

一八八六年(明治一九)暮れに東京に戻りますが、以後の活躍はめざましく、滑稽文学の世界の売れっ子作家として活躍します。

96 「複写」西森武城著『浮世写真百人百色』 一八八八年(明治二二)一月

著述人西森武城、出版人千葉茂三郎、発行所共隆社。

“十人十色というからには百人寄れば百色に違いはない、そこで百人の腹の中を穿って滑稽の百談とするので、百笑してほしい”との序文がついています。

97「写真」錦絵「教育いろは談話」 一八九七年(明治三〇)八月

東京大学法学部明治新聞雑誌文庫

文が骨皮道人こと西森武城、絵は明治の版画界を代表する小林清親です。

98「複写」大久保常吉著『廟堂人物論』 一八八一年(明治一四)四月

東京大学法学部明治新聞雑誌文庫

政府の高官(三大臣十参議)の評判記。著者兼出版人は大久保常吉、発兌元は兔屋誠。

大久保常吉は『武蔵野叢誌』の常連投書家で、北多摩郡小金井村の出身です。自由党に参加した民権家で、滑稽文学の世界でも撃壤庵夢遊と称し、骨皮道人とも滑稽仲間でした。

99「複写」大久保常吉著『花街ひざ栗毛』 一八八三年五月 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫

撃壤庵夢遊戯著。発兌は九春社。「花街」には、「くわくわい」の振り仮名があります。

まほろし 隴 県下 惚 うつつのくにいやほほり 国忌味郡二本棒村多々羅大尽池巢勘内の倅逸齋夢中なる人物の、花街遊蕩日記の形を取った諷刺滑稽小説です。

100「複写」大久保常吉著『復古柱石雷名十勇臣伝』 一八八六年(明治一九)四月

東京大学法学部明治新聞雑誌文庫

堀口昇校閲、大久保常吉編輯、南窓外史批評。発兌は春陽堂。

明治維新の功労者一〇名(佐久間象山、徳川斉昭、木戸孝允、大久保利通、坂本龍馬、大村益次郎、西郷隆盛、武市小権、高杉晋作、岩倉具視)の人物論です。

【小島家の出版活動】

多摩郡小野路村(現町田市)の小島家は、江戸時代後期には小野路村寄場組合三五か村の寄場名主を担当し、地域行政の百姓側の中心として奮闘していました。ただ小島家の当主は、行政手腕の発揮者というよりも、代々にわたって学者というイメージが強いです。

すでに一八〇六年(文化三)に、政武(軍平)・政敏(桂屋)父子は漢学の師山本北山から書齋の号として「博愛堂」を贈られ、また小山田村出身の国学者小山田与清とせもに師事していました。その子政則(悟荘・悟山)も、書・插花・琴曲と多芸で、狂歌師太田蜀山人しよくみんじんにも師事していました。そしてかれらは、当代一流の学者に教えを請う一方で、在村知識人の中心人物として、地域文化のセンター的役割を担っていくのです。とくに、政則の子で寄場名主をつとめた為政(韶齋)は、遠山雲如うんたに・平塚梅花ばいか・真下晚菘ましもばんすう・大沼枕山ちねざんら漢詩人との交流が深く、多摩郡南部の漢学・漢詩ネットワークの中核に位置します。

小島家の人々は、地域の行く末に責任をもつ行政指導者として幕末・維新期の激動を生き、また漢学者・国学者、さらには蘭学者などとの幅広い交流のなかで、表現者としての力量をはぐくみ、出版活動への意欲をかきたたせます。と同時に、秋山佐蔵・湯浅方斎（青木芳斎）の蘭書翻刻への費用拠出や、遠山雲如の漢詩集刊行、大沼枕山の著書の版木保存などと、多摩の出版・印刷史に大きな足跡を刻むのです。

101 『雲如先生遺稿』 一八八七年(明治二〇)八月

小野路町・小島資料館

遠山澹著（故人）、編輯兼出版人小島守政、調布博愛堂開雕^{かいちよう}。活版刷り。

青木芳斎とともにオランダ語本の翻刻を手がけた秋山佐蔵（義方^{ぎほう}）は、漢詩人遠山雲如^{とやまうんじよ}の弟子で、小島為政（守政の父）もまた雲如に師事していました。この著は、秋山義方が雲如夫人から譲り受けた原稿を、小島為政に託して出版を要請したもので、博愛堂（小島家の書斎の号で、漢学者小島家そのものを指します）が出版元となって刊行しました。博愛堂による最初の出版書物と思われず。印刷関係費は、二一円七銭六厘、印刷部数は一三〇部でした。

雲如山人（一八六三）は、国事を憂つる慷慨詩人梁川星巖^{やながわせいがん}の弟子でしたが、無用・漂泊の人に徹し、八王子に一時期移り住んだこともあって、多摩の千人同心や豪農に大きな影響を与えました。

102 小島守政『湘南紀勝』 一八九二年(明治二五)一〇月一日 小野路町・小島資料館

編輯兼発行人小島守政（鶴川村小野路）、印刷所秀英社（京橋区）。活版刷り。

小島守政（慎齋）が塩谷時敏（青山）・中村忠誠とともに津久井地方に遊んださいの紀行をまとめ、同好の士に配布するために出版した書物です。一〇〇部印刷し、印刷所への支払いは、一〇円二八銭三厘でした。小島家の「文用雑録」には、配布先の人名がすべて記録されています。

103 小島守政・誠子著『養蚕百絶』 一八九二年(明治二五)一〇月一日 小野路町・小島資料館

編輯兼発行人は小島守政・小島誠之進（鶴川村小野路）、印刷所は秀英社（京橋区）。活版刷り。桑養にかかわる詩を集めたもので、一三〇部印刷し、印刷所秀英社への支払いは、一四円八四銭でした。小島家の「文用雑録」には、配布先の人名がすべて記録されています。

104 小島慎齋の「文用雑録」 一八八二年(明治一五)一月 小野路町・小島資料館

小島慎齋（守政）が、蔵書の貸与・借用、倉田幽谷・大沼枕山両先生への郵便代、諸書の購求等を記したのですが、中に小島家が出版した三冊の書物の費用や送り先などが記されていて、印刷・出版史料として貴重です。

105 大沼枕山の『枕山詩鈔三編』 一八五九年(安政六)一六七年(慶応三)の作品を収録

小野路町・小島資料館

大沼枕山（一八一八～九一）は、多摩の地方文人の漢詩の師としては、遠山雲如とともに最も有名で、とくに明治一〇年代に枕山が主催した下谷吟社との関係は強く、よく漢詩の添削を受けていました。枕山は、時代にへつらわない気骨ある漢詩人として、多摩の人々に大きな影響を与えました。小野路の小島韶齋（為政）・慎齋（守政）親子も、枕山を師と仰いでいました。

106 『枕山詩鈔三編』の版木

小野路町・小島資料館

散逸寸前だった『歴代詠史百律』の版木とともに、小島家が買い入れて保存していたものです。『枕山詩鈔』は三編までありますが、版木はすべて残っています。

107 大沼枕山の『歴代詠史百律』

一八八五年(明治一八)二月 小野路町・小島資料館

108 『歴代詠史百律』表紙の版木

一八八五年(明治一八)二月 小野路町・小島資料館

【自由民権運動と刷物】

商店や薬関係の広告ちらしを除いて、地域住民の側からの情報伝達手段として刷物が活躍する主な場面は、近世においては俳句の募集や句会の案内などでした。近代に入っても、明治時代を通じて俳句関係の木版刷物を多く見いだすことができますが、俳句関係以外に特に目に付くのは、演説会・懇親会の案内やさまざまな結社・団体などの規則の活版刷物です。

江戸時代の百姓は年貢負担者と位置づけられていましたが、近代社会では国家・社会への積極的な参加が求められ、国民の側からの自発的運動にしろ、官製の組織化にしろ、政治や行政、経済・生産、宗教などの各領域で集団化や集団への参加が進められます。それは国家の側も運動の側も、人々の自発性を調達することに熱心になるということであり、情報伝達を大量・迅速におこなえる刷物の役割は一層大きくなり、郵便事業の普及とともに拡大する一方でした。

中でも多摩は、活版印刷が地域社会に普及し始める時期に国民運動としての自由民権運動が盛り上がり、地域住民を熱く燃え上がらせた。民権運動の高揚には、印刷技術の進歩や活版印刷所の営業開始という前提が確実にあったのです。ただ、ほとんどの案内や規則書に印刷所の名前が入っていないため、印刷所を確認することができず、残念です。

109 東京生糸商会の創立呼びかけ文

一八八〇年(明治一三)七月 金井町・草薙佐市家〔寄託〕

東京生糸商会は、南多摩郡野津田村(現町田市)の石阪昌孝らが、地域産業の核ともいえる養蚕製糸業の発展を阻害している通商の不平等を打開する目的で設立した結社です。

活字は明朝体みんちやうたいで活版印刷ですが、印刷所は明記されていません。東京日本橋に設立が予定されており、東京で刷られた可能性が大きいでしょう。

110 東京生糸商会の規則

一八八〇年(明治一三)八月 金井町・草薙佐市家〔寄託〕

「改正 東京生糸商会 設立方法 営業規則」。呼びかけ文と同様の明朝活字みんちやうかつじを使用した活版印刷です。

111 「複写」神奈川県武蔵六郡懇親会の案内

一八八〇年二月 三鷹市・吉野泰平家

三多摩は一八九三年(明治二六)三月まで神奈川県に属していました。神奈川県のうち三多摩と、橘樹郡、都筑郡、久良岐郡は武蔵国に属していましたが、この地域の県議クラスの名望家を一同に集めて開こうとした懇親会の活版刷り案内です。自由民権運動にかかわる活版刷物としては、

もつとも初期の物です。

112 融貫社規則 一八八一年(明治一四)一一月

金井町・草薙佐市家(寄託)

神奈川県民権運動指導者、野津田村の石阪昌孝らが、原町田村に設立した政治結社「融貫社」の活版刷り規則です。八月に一度草案を刷って有志に配布し、意見を集約して規則を確定し、この規則ができあがり、社員に配布されました。

113 融貫社の仮領収書 一八八一年(明治一四)

小川・細野英雄家

印刷所は明記されていませんが、飾り罫は成文舎渡辺活版所が一八八四年(明治一七)に発行した『一滴千金憂世の涕淚』に使われている枠と全く同一です。あるいは成文舎は、一八八一年頃は明朝体活字を使っていて、融貫社関係の印刷物などを刷っていたのでしょうか。同時期の北多摩郡の自治改進黨関係の刷物(成文舎が印刷した可能性が高い刷物)は明朝活字ですので、その可能性があるかも知れません。

なお、江戸時代の領収書は、ほとんどが手書きでしたが、明治に入り木版の領収書が普及し始めます。融貫社のこの領収書は明朝活字による活版刷りを採用しており、かなり早い事例の一つと考えられます。多摩で活版刷り領収書が普及し始めるのは、明治二〇年代以降でしょう。

114 八王子広徳館の広告 一八八三年(明治一六)一〇月

相原町・青木買家

明治一〇年代の刷物としてはたいへんに珍しく、印刷所の名入りです。「八王子本町三丁目中川氏石印」とあります。中川氏については全くわかりませんが、手書き文字を印刷する手法として木版に替わって普及し始めた石版印刷が使われていることが、これからわかります。石版は、石版石(石灰岩)の面に脂肪性のインキで文字や絵を書いて版をつくり、水と脂肪(油)との反発を応用して印刷する平版印刷の一種です。

広徳館は、代言人(弁護士)事務所ですが、自由党の連絡事務所の役割ももっていました。

115 静脩館の緒言と規則 一八八三年(明治一六)一一月

相原町・青木買家

明朝活字による活版一枚刷物。印刷所は不明です。史料に「明治十一年」とあるのは、誤植です。発起人は神奈川県下の著名な民権家達です。静脩館は、神奈川県出身の青年の、東京遊学のための寄宿舎として設立されたものですが、急進的な民権青年のたまり場となり、小田原出身の文学者北村透谷(当時は門太郎)も、設立当時この館に寄宿していました。

116 「複写」神奈川県苦楽府規約 一八八四年(明治一七)一一月

三鷹市・吉野泰平家

飾り枠の形、手書き文字の印刷から、広徳館の広告と同様石版印刷と考えられます。

神奈川県苦楽府は、自由党解党後の神奈川県旧自由党員の親睦拠点として設立された結社です。

117 葉書に印刷された懇親会案内 一八八九年(明治二二)

相原町・青木買家

官製葉書に明朝活字で印刷された懇親会の案内状です。

118 コンニャク版印刷の活動報告書 一八九二年(明治二五)

相原町・青木買家

明治一〇年代に一般化するコンニャク版印刷ですが、多摩では明治二〇年代には多く見られるようになります。濃い紫のインクで紙に書いた文字を平らなコンニャク面に転写し、これを紙を押しつけて印刷する、平版簡易印刷です。多く刷れないため、少数の急ぎの印刷に使われました。

特に、村役場の連絡文書などに多く見られますが、明治三〇年代以降ガリ版刷りの普及に伴ってしだいに減少するようです。

史料は、一八九二年二月の有名な選挙干渉事件に際して、忠生村で起こった投票箱奪取未遂事件にかかわるものです。

119 「複写」大日本協会の演説会公告 一八九三年(明治二六)一月 東大和市・内野秀治家

一月九日に、北多摩郡府中町の称名寺で開かれる「大日本協会演説会」の「公告」です。政治運動にかかわるちらし類には、あまり印刷所名が入っていませんが、明治二〇年代の刷物には時折入っているものがあります。武蔵野叢誌を発行していた成文舎渡辺活版所は、多くの民権関係刷物を印刷していますが、印刷所名はほとんど入っていません。この公告は、収集した中では唯一名がはいった刷物（一枚物）です。活字は、弘道軒清朝活字こうどうけんせいしやうかつじです。

120 松村弁治郎の『処世大要 原道略鑑』 一八八九年(明治二二)二月一四日 小川・細野英雄家

著者兼発行者松村弁治郎（西府村本宿）、発行者大垣弥太郎（大阪市）、発売所松林堂。題辞は北多摩郡野崎（現三鷹市）の雲外吉野泰三、序文は土佐出身の漢学者山本憲。

松村弁治郎（甘屈堂木公）は、多摩郡本宿村（現府中市）出身の民権家で、大阪鎮台姫路分営の陸軍伍長だった一八八一年（明治一四）に国会の開設建白書を提出し、その後脱走して多摩の民権運動にかかわり、また静岡事件の関係者として逮捕され、その後北海道入植の先駆者になるなど、数奇な生涯を送った人物です。『原道略鑑』は静岡事件で逮捕され脱走罪で処罰され、軍に復帰した後の著作です。このほかに「哲学真論」「原道論」「憲法釈論」などを執筆しましたが、刊行には至りませんでした。

【八王子と青梅の印刷屋さん】

多摩の活版印刷の黎明期を代表する印刷所としては、まず府中の成文舎（渡辺活版所）をあげることができますが、町の規模からいえば八王子は横浜に次ぐ大きな町で、府中よりも印刷の需要は大きく、印刷屋さんの数も多かったと考えられます。この展示会のための刷物収集においても、明治一〇年代には「八王子刊行会社出版部」「八王子活版所」などの名を確認できますし、石版を手がける「中川氏」の存在も知れます。資料的には未確認ですがおそらく、木版を手がける近世以来の印判師も多く活躍していたでしょう。

ただ、収集した資料からみると、八王子の活版印刷が本格化し印刷・出版業が盛んになるのは明治二〇年代に入ってからのようなようです。「柴田活版所」「高嶋活版所」「尚文館」の名入りの刷物や八王子案内、雑誌などが数多く見いだされるようになります。

八王子に次ぐ大きな町といえば、青梅でしょうが、明治二〇年代中頃には「間坂屋（高野清三郎）」が、明治三〇年代には「青梅活版所」の存在が知れます。

八王子や青梅で刊行される雑誌類の印刷は、一部を除いて地元ではなく東京の印刷所へ依頼し

ていましたから、まだ需要をまかなうだけの能力や大量印刷・製本の技術に問題があったようですが、柴田活版所は雑誌『八王子織物新報』を刊行して地域産業の振興をはかるうとするなど、意欲的な出版活動を展開していました。

121 八王子活版所の刷物・罫紙 明治一〇年代

相原町・青木貢家

明治一〇年代に営業が確認される八王子の印刷屋さんの一つです。現時点では、武相銀行の出張所設立願い（一八八三〃明治一六年一〇月）に使われたこの「神奈川県下」の罫紙一枚が収集されただけです。展示会のために収集した資料の中で、八王子の印刷屋さんの名入り活版印刷物としてはもっとも古いもの一枚です。ただし、明治一〇年代に八王子で活版印刷を手がけていた印刷屋さんには、このほか「八王子刊行会社活版部」が確認されます。

122 八王子本町三丁目中川氏の刷物・八王子広徳館の広告 明治一〇年代

相原町・青木貢家

明治一〇年代の八王子の印刷屋さんを、現存する名入りの刷物から確認すると、「八王子活版所」「八王子刊行会社活版部」のほかに、石版印刷を手がけていた中川氏が確認されます。史料は、一八八三年（明治一六）一〇月の石版刷物・八王子広徳館の広告です。

123 八王子大横町柴田活版所の刷物 明治二〇年代以降

つくし野・山下憲治家 青梅市郷土博物館 八王子市郷土資料館

柴田活版所は、府中の成文舎渡辺活版所と並んで、多摩の活版印刷の黎明期を代表する印刷屋さんです。柴田家は、八王子大横町の名主の家柄で、又兵衛（嘉永五年生まれ）が印刷業を始めたのは一八七一年（明治四）と伝えられています（織物製造業と兼業）。収集した柴田活版所の名入り刷物で、年代の確定できる物は一八九〇年（明治二三）以降ですから、印刷屋さんとしての本格的事業は明治二〇年代に入ってからなのかも知れません。明治二〇年代には、『八王子織物新報』という雑誌を発行していたことが確認されていますので、メディアを利用した地域産業の育成という課題にも取り組む意欲的な事業家といえましょう。『八王子織物新報』の広告を42頁に史料紹介した。」

印舗東林堂出張所高橋金太郎の印判彫刻の広告 つくし野・山下憲治家〔寄贈〕

「複写」度量衡売捌所杉本松之輔・活版印刷所柴田又兵衛の専売特許養蚕家必要寒暖湿乾計
発売広告 一八九〇年（明治二三）四月 青梅市郷土博物館

弁護士利光品吉の出張所設置広告 一八九九年（明治三二） 八王子市郷土資料館

八王子町政改革派の政談大演説会緊急広告 一九〇〇年三月 八王子市郷土資料館

124 八王子町高嶋活版所の刷物 一八九一年一月開業

相原町・青木貢家 八王子市郷土資料館

明治二〇年代の八王子における活版印刷屋さんとしては、柴田活版所とともに双璧をなします。明治二五年一〇月に、梅沢浅次郎が編輯し高嶋活版所が印刷、高嶋活版所の経営者牧野恵蔵が発行人で出版された『八王子明覧』（八王子市郷土資料館）には、「高嶋活版部」の広告が載っており、創業時期の活版印刷所の様子をすることができます。“筆墨硯紙類書籍販売の老舗として名声高い高橋筆墨店は、明治二四年一月より活版業を始め、鮮明・低廉・迅速と好評を博してきました

たが、なお一層業務を拡張することになり、このたび印刷器械と活字数万を増加し、熟練の工員数名を雇い入れたので、活版・銅版の刷物は一切依頼に任せます」とあります。明治三〇年代にはいると、八王子案内の書物や『南多摩郡私立衛生会雑誌』などの印刷も手がけるようになります。『八王子明覧』所載の広告については、42頁に全文史料紹介した。」

私立八王子女学校・私立八王子幼稚園の開設広告 一八九二年(明治二五)二月 八王子市郷土資料館

私立八王子女学校・私立八王子幼稚園の生徒募集広告 一八九三年(明治二六)五月 八王子市郷土資料館

牛乳代価領収証二点(南多摩郡由木村鍾水搾乳所 長養舎) 一八九九年(明治三二) 相原町・青木貢家

125 八王子横山町尚文館の印刷物 明治三〇年代以降

八王子市郷土資料館

尚文館はもともと八王子では書籍販売店であったと思われませんが、一八九九年(明治三二)の聯合共進会にさいし『八王子案内 共進会のしるべ』(八王子市郷土資料館)の出版・販売を手がけました。このころ、後に尚文館活版所を運営する小島徳治郎は、東京牛込区で一心堂小島工場という印刷所を経営しており、印刷人として名を連ねていました。いつから八王子に活版所を開いたのかわかりませんが、明治四〇年代にはいると『南多摩郡私立衛生会雑誌』の印刷所が高嶋活版所から尚文館に代わり、大きな仕事を手がけるようになるようです。

126 「複写写真」尚文館活版所の店構え 一九二二年(大正元)撮影

八王子市郷土資料館

八王子商工会議所『八王子商工業案内』(八王子市郷土資料館蔵)より複写。

127 活版請負をおこなう開闢堂 明治二〇年以前

相原町・青木貢家

書籍販売や新聞の取り次ぎ所だった八王子八日町の熊沢伝四郎経営の「開闢堂」が、活版の請負をおこなっていたことは、開闢堂の新聞代の領収書の枠外印刷文字からわかります(「活版類請負仕候」「受取証千枚二付二拾六錢」)。

128 「複写」青梅活版印刷所の刷物 明治三〇年代

青梅市郷土博物館

青梅には、明治二〇年代中頃には高野清三郎経営の「間坂屋」が営業を始めており、ついで「青梅活版印刷所」の刷物が確認され(明治三五年二月 西多摩郡霞村石井商店の醤油売出広告、青梅市郷土博物館蔵)、また明治終わりには池田周次郎の「かまや時計舗」が活版印刷の引き受けをおこなっていたことが確認されます。

129 「複写」青梅の印刷屋さん かまや時計舗 明治終わり

小野路町・小島資料館

『武蔵文庫百家明覧』一九一〇年(明治四三)四月刊より複写。
創業年代ははっきりしませんが、明治の終わりには池田周次郎が経営する「かまや時計舗」が活版印刷をおこなっていたことがわかります。

130 高嶋活版所の『八王子明覧』 一八九二年(明治二五)一〇月刊

八王子市郷土資料館

編輯人梅沢浅次郎(八王子町大横)、発行人牧野恵蔵(八日)、印刷人加藤清貞(牧野家寄留)、印刷所高嶋活版所(八日)。

安在権五郎の序文は、この冊子を「八王子町を明覽する顕微鏡」と評しています。

131 柴田活版所印刷の『伝染病予防法令』 一八九七年(明治三〇)印刷 常盤町・薄井梅子家
法令を印刷しただけの冊子ですが、珍しく印刷所の名が入っています。最後のページに「八王子町大横柴田活版所印行」とあります。

132 小林田城編『八王子繁昌誌』 一八九九年(明治三二)七月 多摩市・佐伯邦昭家
八王子町八日の高嶋活版所が印刷し(印刷人伊藤銀治)、牧野国太郎が発行しました。八王子の歴史・地理、現状の紹介書で、聯合共進会を間近にひかえての出版でした。

133 『一府九県聯合共進会手引草』 一八九九年(明治三二)一〇月 八王子市郷土資料館
八王子町横山の熊沢広吉が経営する「文華堂」が発行した、二宮眞彦編著の『一府九県聯合共進会手引草 一名八王子案内』です。印刷は、多摩ではなく、神田錦町の上田屋活版所(楠磯太郎)です。

134 『八王子案内 共進会のしるべ』 一八九九年(明治三二)一〇月 八王子市郷土資料館
八王子町横山町の尚文館が発行所となり、東京牛込区の一心堂小島工場で印刷し(印刷人小島徳治郎)、生沼重太郎が発行しました。定価四銭。「一府九県聯合共進会」にやってきた関係者、見物人のための案内書です。

135 『一府九県聯合共進会人名目録』 一八九九年(明治三二)一〇月 多摩市・佐伯邦昭家
編輯人小林田城。八王子町横山町の尚文館が発行所となり、東京牛込区の一心堂小島工場で印刷し(印刷人小島徳治郎)、小川徳治郎が発行人になっています。「一府九県聯合共進会」への出品者の、府県別・出品産物別一覧名簿です。

136 『一府九県聯合共進会受賞人名録』 一九〇〇年(明治三三)一二月 多摩市・佐伯邦昭家
八王子町横山町の書肆尚文館が発行所となり、東京牛込区の一心堂小島工場で印刷し(印刷人小島徳治郎)、小川徳治郎が発行人となっています。成績優秀者の一覧です。

【八王子と青梅で刊行された雑誌】

137 「複写」『八王寺新誌』 一八八五年(明治一八)一月創刊 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫
奥津定次郎が主催していた耕余吟社が発行した、月二回の投稿文芸雑誌です。詩文・歌俳・詩文俳談・講義の四欄を設けていました。『武蔵野叢誌』の文苑欄を独立させたような雑誌です。そういえば、『武蔵野叢誌』の廃刊直後に創刊号が出され、活字は渡辺活版所が使用していた弘道軒清朝活字が使われています。ただ、本誌の奥付の印刷人の欄には、牧野三之助とあります。いずれにしても、『武蔵野叢誌』に次ぐ、多摩でもっとも早い雑誌の一つといえます。

138 「複写」『進歩鏡』と『桑都』 一八九〇年創刊 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫
『進歩鏡』は、八王子町横山の西田直堅の拓進堂が発行した総合雑誌です。五号まで発行し一八九一年(明治二四)一月発行から『桑都』と改称しました。県の官令、郡や教育界の情報、詞林

・小説・寄書・談話・雑報と多彩です。「三号所載の定価・広告料・印刷関係の広告を42頁に紹介した。」

139「複写」『青年会雑誌』第五号 一八九〇年二月刊 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫
武州西多摩郡青年会本部発行。一八八九年八月に青梅で結成された西多摩郡青年倶楽部の機関誌として発行された『青年会通信書』が前身で、四号から『青年会雑誌』となりました。活版で、月刊。印刷所は記されていません。

140「複写」『染色雑誌』 一八九〇年(明治二三)二月創刊 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫
一八八六年(明治一九)ころから本格的に始まる八王子の染色技術改良への取り組みは、一八九〇年(明治二三)には染色の改良進歩をはかり、染業社会の知恵袋になりたいと宣言する月刊雑誌『染色雑誌』を生みます。発行人は八王子町八日の荻島信吉、編集人は子安の吉田亀寿。八王子染色講習所(後の八王子染色学校)の中村喜一郎らが、執筆にあたりました。

141『染色雑誌』第三六号 一八九三年(明治二六)一月一五日刊 八王子市郷土資料館
毎号貼付されていた糸見本です。東大法学部明治新聞雑誌文庫所蔵の『染色雑誌』の糸見本ははずされてしまっているのです。貴重です。「この雑誌に掲載された『八王子織物新報』の広告を42頁に史料紹介した。」

142高嶋活版所印刷の『南多摩郡私立衛生会雑誌』 一八九八年(明治三一)創刊か

小川・佐藤博(晃)家(寄託) 相原町・青木買家

南多摩郡私立衛生会(南多摩郡役所内)が発行、印刷所は八王子町字八日の高嶋活版所(印刷者は牧野国太郎)です。総会記事によれば、第一号と二号の発行部数は二〇〇〇部とありますので、各号一〇〇〇部だったと思われます。第一号の印刷費は六三円四五銭六厘、第二号は四〇円四〇銭でした。

第三号(明治三二年七月)、第五号(明治三三年四月)が佐藤家、第四号(明治三二年一月)が青木家の所蔵です。

【町田の本屋さん印刷屋さん】

町田で活版印刷所が営業を開始するのは、所蔵の資料を確認するかぎり一九〇四年(明治三七)で、町田村原町田の「老沼印刷所(武蔵野活版所)」(老沼鴻斎経営)がその最初です。原町田や周辺の村の店の売りだしや医者の方告などに、老沼印行、武蔵野印行などの文字が見え、また町田小学校同窓会の機関誌『むつみ』の印刷(一九〇六年)もおこなっていますから、能力ある印刷所だったのでしょう。また明治四〇年代には、忠生村木曾に「美工堂」(石川三蔵経営)という活版・銅版・石版などの各種印刷を手がける印刷屋さんがあったことも確認されます。

それ以前の町田の印刷屋さん、残念ながら現在のところ確認されていません。

ただ、すでに明治初年には、原町田村に和漢の書籍を販売する「東光堂」という書林(本屋さん)

ん)があり、一八九五年(明治二八)には、鶴川村三輪の矢沢幾四郎の著作『柿樹栽培法必携』の発売元となって、果樹栽培に意欲的に取り組んでいた地元青年の出版を手助けしていたことがわかります。印刷は、橘樹郡生田村の岸長吉で、このころの俳句関係の木版刷りの刷物・書物に彼の名前を多く見出しますので、町田・稲城あたりの木版刷り需要の多くを引き受けていた様子が知れます。

143 東光堂発売の『柿樹栽培法必携』 一八九五年(明治二八)四月刊 小川・細野英雄家

鶴川村三輪の青年、矢沢幾四郎(耕名、十誉耕夫)の著作『柿樹栽培法必携』は、木版刷り書物で、印刷は橘樹郡生田村生田の岸長吉があたり、発売は原町田の書肆東光堂が担当しました。定価は、金一〇銭(郵送費二銭)でした。東光堂は、“地方出版”にも参画していたのです。

矢沢幾四郎は「大日本矯農俱樂部」に加盟し、全国の篤農家とはかって種苗の交換や農具の改良に尽くす若い農民でした。また、岸長吉は俳句関係の木版刷物を多く手がけていました。

144 原町田の書林東光堂の請取証 一八七四(明治七)〜七八年(明治一一)頃 図師町・佐藤正心家
原町田村にあった書林東光堂の木版刷り請取証です。図師村の佐藤正憲が、『損益利足弁』を一八銭で買ったさいの請け取りです。

145 書肆東光堂の引札曆 一八八七年(明治二〇)十一月 小野路町・小島資料館
東京で印刷された略暦を買い求めて、「書肆東光堂」の店判を押ししてお客さんに配ったようです。商店名は、木版で刷り込むのが普通ですから、ちよっと手抜きという感じです。

146 武蔵野活版所が印刷した雑誌『むつみ』 一九〇六年(明治三九) 当館
町田小学校(町田第一小学校の前身)の同窓会が発行した同窓会誌『むつみ』の創刊号は、老沼鴻斎の経営する「武蔵野活版所」が印刷を担当していました。

147 原町田最初の活版印刷所「老沼印刷所」 明治三〇年代後半創業
つくし野・山下憲治家(寄贈)

町田市域に活版所ができるのは、明治三〇年代後半で、「老沼印刷所」・「武蔵野活版所」が最初と推測されます。一九世紀の印刷屋さんの範囲から逸脱しますが、紹介しておきましょう。

日新堂新聞店大沢利三郎の広告 一九〇四年(明治三七)六月

義沢丈助の医院開業広告 一九〇四年(明治三七)八月

広瀬屋の歳暮売出し広告 年不明

なお、一九〇六年(明治三九)に刊行された町田小学校の同窓会雑誌『むつみ』は、武蔵野活版所の印刷です。ただし、現存のうち四号からは府中の渡辺印刷所(渡辺寿彦)が担当しています。

148 「複写」武蔵野印刷所の領収書 一九一〇年(明治四三) 原町田・三橋国民家

この飾り罫は、青梅活版所の刷物にも使われています。

149 『武蔵文庫 百家明覧』 一九一〇年(明治四三)四月 小野路町・小島資料館

多摩四郡の名士録として刊行されたもので、南多摩郡町田村工業家の項には、「武蔵野印刷舎 老沼鴻斎 三世寶椎庵」とあり、「鼎吟社」ともありますから、老沼は俳人でもあったのでしょう。

150「複写」忠生村木曾の印刷屋さん「美工堂」 『武蔵文庫百家明覧』一九一〇年(明治四三)四月より 小野路町・小島資料館

創業年代ははっきりしませんが、明治の終わりには木曾(町田市)に石川三蔵が経営する「美工堂」があり、活版・銅版・石版などの印刷業務をおこなっていました。酔月という号をもっていましたから、俳句をよくしたのでしょう。原町田の老沼印刷(武蔵野印刷舎)の老沼鴻斎も、また俳句関係の木版印刷を手がけていた生田(川崎市)の岸長吉ともに俳句をよくしていました。

【武相銀行の印刷物】

町田市域で最初に設立された銀行は、「武相銀行」と呼ばれる私立銀行でした。南多摩郡相原村(町田市相原)の青木勘次郎を頭取に、一八八二年(明治一五)八月に設立されたこの銀行は、相原村に本店を置き、原町田村と津久井郡の久保沢に相次いで支店を開き、活発な金貸し営業を展開します。

当初の株主は四〇名余り。れっきとした会社組織ですから、創立規則や申合規則、株券、証書や受取証、そして半年ごとの営業報告など、大量の刷物が必要とされました。頭取だった青木家には、銀行資料が比較的まとまって残されていて、地方銀行の実態を示す貴重な資料群となっていますが、その中にはこれら印刷物の発注先や費用の資料も少しですがあって、貴重です。

武相銀行は、二〇〇枚に及ぶ株券の印刷を予定し、規則類の印刷も必要だったからでしょうか、日本橋の銅版・石版の印刷所「東陽堂」から株券の見本を取り寄せた上で、株券と規則類の印刷を依頼していました。株券二〇〇枚、規則二〇〇部で九六円という金額でした。

株券や小学校の終了・卒業証書などは、豪華な飾り枠や細かい模様を施しますので、石版や銅版が用いられましたが、武相銀行の株券には「銅版製」とわざわざ刷り込まれています。部数が多かったので銅版印刷にすぐれた東京の印刷屋さんへ印刷を持ち込んだのでしょうか。

151武相銀行の株券の見本 一八八二年(明治一五)印刷 相原町・青木買家

こつた飾り罫、地の模様など、株券は当時の実用的刷物の中では華やかな部類にはいるでしょう。「東京東陽堂銅版製」とあって、印刷所、印刷方式がわかります。

152武相銀行の株券 一八八二年(明治一五)印刷 相原町・青木買家

二〇〇枚刷った内の一枚です。当初は額面五〇円、二〇〇〇株、一〇万円の資本金が予定されていたのです。ただ、最終的には、九〇三株四万五一五〇円にとどまりました。

153東陽堂から送られた見本の株券 一八八二年(明治一五)四月発行 相原町・青木買家

株券の印刷所、東陽堂が見本に送ってきた株券です。「東京東陽堂製版」のほかに、製版者として「本多信友刻」とあります。一八八四年(明治一七)の不況下、各地の私立銀行は負債を抱えた民衆の返済猶予の大衆行動に直面します(困民党事件)。八王子周辺では、武相銀行はもっとも早

く困民党の脅威にさらされますが、株券の見本「大日本帝国茨城県太田協同会社」もまた、太田地方の困民党に押し掛けられます。

154 株券・規則書製造料の請求書 一八八二年(明治一五)一〇月七日 相原町・青木買家

銅版石版彫刻印刷所東陽堂の武相銀行宛領収書です。株券二〇〇枚八四円、規則書二〇〇部二〇円でした。

155 武相銀行規則書増刷分の領収書 一八八九年(明治二二)一月一八日 相原町・青木買家

武相銀行規則の増刷を、本郷の花房活版所に依頼したさいの領収書です。

156 新聞広告の領収書 一八八二年(明治一五)一〇月 相原町・青木買家

明治一〇年代、自由民権運動の盛り上がりとともに、演説会の開催や住所変更などを新聞の広告欄に載せる事例が増えますが、地方の銀行の広告もかなり目に付きます。武相銀行は開店広告を「自由新聞」と「東京横浜毎日新聞」に掲載しますが、その領収書が残っています。自由新聞は二円五〇銭、東京横浜毎日新聞は一円二〇銭でした。自由新聞の領収書は葉書へ活版印刷、東京横浜毎日新聞は手書きです。

157 新聞広告料送金の合符 一八八二年(明治一五)一〇月 相原町・青木買家

「自由新聞」に載せた武相銀行開店広告の費用を送付したさいの郵便局発行の証明書です。郵便局はかなり早い時期から活版刷物を使用しているようです。展示会のために収集した役場関係の活版刷り領収書は、明治二〇年代に入ってからです。

158 「複写」自由新聞に載った武相銀行の開店広告 一八八二年(明治一五)九月二十九日号 当館

復刻版『自由新聞』より

159 新聞広告の領収書 一八八四年(明治一七)四月 相原町・青木買家

武相銀行頭取の青木勘次郎が病死した旨の広告を新聞に掲載したおりの領収書です。「自由新聞」は八四銭、「東京横浜毎日新聞」は七二銭でした。ともに活版一枚物の領収書に変わっています。「広告料領収証の全文を、43頁に史料紹介した。」

【町田市内の銅版画】

160 青木正太郎家の銅版画 明治一〇年代後半期 相原町・青木買家

明治一〇年代にはやった、屋敷の銅版刷物です。

南多摩郡相原村(現町田市)の青木正太郎家の銅版画で、町田市域では代表的な銅版屋敷図です。青木家は、私立小学校養英館や私立の武相銀行を設立し、正太郎は自由民権家、神奈川県会議員としてもよく名前の知られた人物です。

現在の青木家母屋は、この銅版画と同様に草葺きで、母屋手前の左右の蔵も一棟ずつ残されていますので、この絵の雰囲気は今も同じです。ただ屋敷図には、母屋の左側背後に祖父の易直やすなおが建てた「観岳亭かんがくてい」があり、右横の奥には、父の勘次郎(易良やすよし)が校主となって設立した私立小学校

「養英館」の西洋風校舎が見えますが、今はありません。

161 小島守政家の銅版画 明治一〇年代後半期

小野路町・小島資料館

江戸時代後期には、多摩郡南東部を中心にした小野路村寄場組合の名主をとつとめ、漢学・漢詩、天然理心流など学問・文芸・剣術のセンター的役割も担った小野路村（現町田市）の小島家の銅版画敷図です。

162 「複製版」大泉寺の銅版画 一九〇五年（明治三八）四月

当館

審美館製版。

南多摩郡下小山田村（現町田市）の古刹、補陀山大泉寺の銅版画です。

163 「複写」南多摩郡の地価番付「地価大鑑」 一八八六年四月 金井町・草薙佐市家（寄託）

編輯人奥津定次郎（八王子本町寄留）、出版人山口直次郎（八王子本町）。

南多摩郡の地価所有額四〇〇円以上の所有者名の一覧番付です。県会議員の被選挙権資格が地価所有額四〇〇円以上ですから、被選挙権者の名簿という性格も持っています。

最高の地価金額は、日野の有山彦吉で一万九二七九円八八銭です。町田市域では、筆頭が小山の萩原半蔵で九三三五円七八銭二厘、次いで木曾の三沢忠兵衛、南大谷の足立德兵衛、小野路の小島守政らが続きます。

史料9 「西洋活板諸用覚帳」

八王子市郷土資料館

(表紙)

安政四丁巳年十一月

一金六兩

徳兵衛

西洋活板諸用覚帳

銀貳百壹匁四分

穠山氏

十二月二日 十月迄

源七

一金貳拾兩

源七

キユンスト一件

十七日

源七

一金拾兩

十五兩受取

金百九拾三兩壹分百七文

十兩相渡ス

金拾六兩

内百六拾兩分巳十一月
午十月迄ニ新二兩壹割リ

十一月十四日出府

雑用

引ノ三拾三兩壹分百七文

一金壹分

銀貳百七拾九匁三分

貳百八拾貳文

内 傘壹本

巳十一月 午十二月迄壹割貳分リ

本町進物

銀九拾六匁 百六拾兩分ニケ月六分リ

本所中食

小以ノ拾六兩下

三百七拾五匁三分

有り

ノ為金貳百拾五兩貳分百四拾文

廿五日
一四百文

たばこ貳玉

一金貳分下

福原 取

十二月廿六日
一金五兩

源七

銀六匁

疊代分

十二月卅日
一金拾兩

ブーク預リ
別口

銀貳百九拾四匁六分五リ

徳兵衛

(安政四年) 巳十一月 午十月迄

(安政五年) 午正月十二日 十月迄

源七

一金拾六兩貳朱

紙代

一金拾五兩

源七

銀百九拾九匁七分

東都二而

正月十五日出府廿日歸リ

十月廿一日夜 十月迄

渡ス

一金貳朱

出府雑用

銀九拾匁七分五リ

一金五兩

宅二而

二月七日 十月迄

源七

銀四拾六匁八分

渡ス

一金五兩

源七

十一月二日 十月迄

源七

二月廿七日

自身

一金五兩

渡ス

銀五拾四匁

出府渡

十七日

一金貳兩

同

三月 一六日と申事
一九日頃 十月迄

十八日

同

一金拾兩

源七

一金拾五兩

同

四拾八匁

廿二日

二月廿七日之出府者雑用なし

四月四日出七日帰り
一金貳朱

出府雑用

同日
一金壹分壹朱

方齊
出府雑用

内七拾壹文余ル

四月九日朝十月迄

十二月廿三日
一金三朱

所左衛門
矢ノ口江飛脚

一金拾兩

新宅頼送ル

切

源七

角借

四月廿五日
一金五兩

新宅へ頼送ル

一式分壹朱

小島

銀六十三匁四分貳り

林蔵

三百七拾四文

立かへ

五月二日十月迄

自分 渡

五口

一金拾三兩

四月廿九日出五月三日帰り

雑用

為金百八拾九兩三朱
銀六匁

五月廿五日
一金拾兩

新宅頼送ル

三ノ四百拾七文

銀八拾貳匁八分

五月廿九日出府六月四日帰り

三百拾七文

銀壹ノ百三十三匁九分四リノ高

百十六文

雑用

六月九日十月迄

新宅頼送ル

銀八拾四匁

一ケ月分
六分り

銀貳拾壹匁

六月

新宅

銀五拾九匁七分

四十九兩三分
一ケ月分

七月朔
一金五兩

源七

小以ノ壹貫貳百七拾七匁六分四リ

銀廿五匁

立替呉

金貳兩

常信損

七月廿二日
一金貳兩

出府渡又

リシわけ

銀四匁八分

〃 百五十四文

路費

引
為金貳百拾兩壹分貳朱五拾五文

八月朔十月迄
一金三兩

孫兵衛殿

外布団衣類等アリ

銀七匁四分貳り

頼遣又

二口

為金四百貳拾五兩三分貳朱百九拾五文

八月十一日
一壹ノ文

駄賃

午十二月迄

〃 十二日

吉蔵

勘定仕上け

一金壹兩貳朱

出府

損失

八月十二日出十四日帰り

一五百拾文

十月十三日
一金三分

梅村

本ト子賃

五月十三日

入金貳分式朱
式匁五分

山佐
シキート
二巻代取

二月七日
一金五兩
三月十九日頃
一金七兩

源七
江戸
源七
江戸

同上
入金壹分

桂川礼

但十兩渡シ呉

九月九日
入金三分

方斉歸り之節
差引受取

廿八日夜三兩返又

委細外帳ニアリ

七月朔
一金五兩

時借

〃廿三日
入金壹分式朱

松崎分

九月六日
内
金拾五兩

新宅江返又

届キ来ル

十二月卅日
内
金五兩

十月
入金貳分式朱

テリーミツテル二巻代

未二月廿三日
内
金拾兩

返又

銀貳匁五分

須原伊八

返又

返又

〃式兩式分式朱五匁

人之覺

角米酒借用

二月廿三日
一金拾兩

十月迄
式朱金二兩
自身借

銀五拾四匁

三月
一金拾兩

十月迄
但孫無尽金
さし引二兩

銀四拾貳匁

内壹兩壹分者

四月三日夜受取

新宅徳兵衛借用

十一月十七日
一金貳兩

源七
江戸

〃十八日
一金拾五兩

同断

廿二日
一金六兩

主人
江戸

四月八日夜
一金拾兩

同断
新宅へ頼送ル分
源七

十一月二日
一金貳拾兩

源七
江戸

銀四拾二匁

但角二て

〃十七日
一金拾五兩

源七
江戸

〃廿五日
一金五兩

新宅・時借と申もの

佐蔵受取

此分小島江

新宅林蔵頼

内十兩渡又

壹ヶ月払

送ル分

十一月廿六日
一金五兩

源七
江戸

五月二日
此分二
利払
一金貳拾五兩

同断
江戸二兩
源七・借受

〃卅日
一金拾兩

徳兵衛
源七
江戸

其預別件

〃三拾兩

銀百八拾匁

正月十二日
一金拾五兩

源七
江戸

五月廿四日
一金拾兩

同断

銀三拾六匁

九月六日

一金拾五兩

同断

借新宅江

銀拾八匁

返入分

内十一月卅日

金五兩

返入

内十一月三日

金五兩

返入

内〃廿五日夜

金五兩

返入

十二月卅日

り金三兩

内払

未正月十五日

り金三兩

内払

〃七月十一日

り金貳兩

内払

五月

一百四拾八文

同人・返りもの駄チン

七月十一日

一貳百四拾文

和泉吉賃せん

廿一日

一貳百文

シキート
取寄セ駄賃

九月九日

一金壹分貳朱

ブーク仕立代
内送り

十月朔

一金壹分貳朱

〃 梅村

三百貳拾六文

〃 一金壹兩貳朱

〃 三卷分

〃 一三百六十四文

カルコ

〃 一金三朱程

出府雑用

一金貳分

蔵敷山田屋

銀四百八拾匁

八拾兩金巳十一月

午十月迄 壹割之利

銀三百七拾貳匁

午〃高

銀四拾九匁五分

午十一月分

元百六十五兩

年六分之利

銀四拾六匁五分

〃十二月分

元百五拾五兩之利

同断

四口

銀九百四拾八匁

為金拾五兩三分三匁

八兩三度二入ル

引

銀七兩三分三匁

同

一壹貫六百文

引方駄賃

(文久元年) 酉十一月

一金壹分

齋江頼

(文久二年) 戌六月

一銀壹匁五分

梅村江菓子

〃七月八日

一金壹兩貳分

梅村 仕立内金

閏八月

一金壹兩壹分

〃 払

九月

貳百卅一文

梅村江送り時

(安政六年) 未

正百廿六匁

黒川行賃

一貳百文

黒川行賃

一六百文	駄賃	入金三兩卜	山城屋
外 八十二文	須原 せに	二百四拾七文	須原屋
十月十五日	被取分	余り人之覚	
一三十二文	梅村状賃	(文久三年) 戌六月	和泉屋分 内取
十月廿四日	梅村江送り	入金壹兩壹分壹朱	
一金壹兩貳分	銀三匁		
廿九日	駄賃	七月四日	同断
一七百元		入金貳分	
(文久三年) 亥正月	ブーク仕立	十三日	同断
一金壹兩三朱		入金貳分	
貳百拾六文	ブーク仕立	八月	山城屋分
		入金壹兩壹分壹朱	
一金貳朱	道具	貳百五拾貳文	
一 四百文	駄賃	九月	須原屋分
四月廿三日	去冬分	入金壹兩	
一 貳百三十二文	梅村へ状賃	廿八日	緒方先生
		入金壹兩貳分	方齋持参
			宅売
(安政六年) 未三月		十月十四日	年賦金取
入金拾兩貳分貳朱	三軒売揚	入銀廿匁二分五り	
十月朔	山佐	十二月廿七日	方齋
入金五兩壹分三朱		入金貳兩	
壹匁貳分五り			
入金三兩貳分貳朱	泉吉	(文久三年) 亥二月十二日	山城屋二
		入金三兩	和泉屋八
貳百六十八文		壹分壹朱	松木受取呉
入金壹兩貳朱	梅村三卷分	七月九日	山城屋
(万延元年) 申九月		入金壹兩	三部
入金壹兩壹分	伊八	七分五り	
銀六匁			
入金三兩貳分三朱	山佐	同日	須原屋貳部
		入金貳分貳朱	松木受取
百六拾四文		三匁	芳齋
			年心金取
入金壹兩	泉吉内取	十二月廿九日	山佐
(文久元年) 酉十一月		入金貳兩	四部取
入金貳兩壹分貳朱	泉吉	(元治元年) 子三月十一日	
		入金壹兩壹分貳朱	
		取	

つり銀壹匁五分 返又

入金貳兩

年ふ取

〃十二月八日

入金貳兩壹分

山城屋六部

（慶応三年）
卯七月十七日
入金貳兩

同人
同断

銀六匁七部五り

須原屋壹部

十二月廿四日

入金貳兩

芳齋
年ふ取

（安政五年）
午八月十三日改

一金貳兩三分一朱

改名金

（慶応元年）
丑十一月卅日

入金壹兩貳分三朱

山城屋
須原屋

同日方齊江相渡置候

（慶応二年）
寅正月九日

芳齋

「編者注 主筆はゴシックで表した。」

史料11 小島家の「貸金利息帳」

小島資料館

年不明「（貸金利息帳）」

秋山

之談二相成、内金又薬礼等二而取残金也、文
久三戌年貸金帳二而可知事

（元治一五開）
〃五月二日

碓造

元金貳分五匁

明治4年「明治四辛未晩冬貸金利息帖」

右者帯取壹筋分貸シ

武州子安村

安政四巳年八月

秋山碓造

慶応3年「貸金銀利息帳」

一元金五兩三分貳朱

武州

貳匁五分

子安村

右道助老祖母大病之節かし、其後無利息二い

安政四巳年八月

合 秋山碓造

たし、近々入金、又薬礼二而差引残金也、文

一元金五兩三分貳朱ト

久三戌年貸金帳二而可知事

貳匁五分

右者元金拾兩用立、薬礼二而内取貸候後咄有

明治5年「明治五壬申貸金利息帖」

之、無利息貸シ訳八文久二戌年貸金帳二而可

武州子安村

知事

安政四巳年八月

秋山碓造

一元金五兩三分貳朱

明治2年「貸金及質地潰百姓取立合帳」

貳匁五分

武州子安村

右証文貸シ、訳前同断帳二而可知事

名主

合合 秋山碓造

明治6年「貸金利息帳」

安政四巳年八月

（同）
相州子安村

一元金五兩三分貳朱ト

安政四巳年八月

秋山碓造

貳匁五分

一元金五兩三分貳朱

右者元金拾兩用立、其後無利息二而近々入金

貳匁五分

右者道助祖母大病之砌、活判一条二付差支金拾兩証文貸シ、其后藥礼等二而内取、差引残り尤不外成義二付、無利足二致候様申付、其意二任セ候事

明治7年「貸金利息帳」

武州子安村
秋山礎造

一元金五兩三分式朱

式匁五分

右元金拾兩之内、藥礼取残り無利足証文有之候、右者残金可相返之処、青木勘二郎、榎本仙次郎兩人江借入金不残返済いたし候而、兩人共其年二**就木善**ならず候故二返金不致、其内返金いたし候由、先年上溝二而老母柘州兄江对面之節話有之候由也

明治12年「貸金利息帳」

子安村

明治8年「貸金利息帳」

子安村
秋山義方

一元金五兩三分式朱

式匁五分

安政四巳年八月元金拾兩
利金壹兩式朱式匁五分
一元金五兩三分式朱
銀式匁五分
秋山義方

明治9年「貸金利息帳」

子安村
秋山義方

一元金五兩三分式朱也

式匁五分

右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月式兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年以来無利足也、文久二貸金帳二委シ

元金拾兩之処、藥礼其外内入分引残也

明治10年「貸金利息帳」

子安村
秋山義方

一元金五兩三分式朱

式匁五分

右元金拾兩之内、藥礼取残り無利足

明治13年「貸金利息帳」
安政四巳年八月元金拾兩
利金壹兩式朱式匁五分
一元金五兩三分式朱
、銀式匁五分
右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月式兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年以来無利足、文久二貸金帳二委シ

明治12年「貸金利息帳」

子安村
十日市場

明治14年「貸金利息帳」

秋山義方

安政四巳年八月元金拾兩

利金壹兩貳式匁五分
一元金五兩三分式朱

旬市場

一元金五兩三分式朱

秋山義方

銀式匁五分

秋山義方

銀式匁五分

右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月貳兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年已来無利足、文久二貸金帳二委シ

右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月貳兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年已来無利足、文久二貸金帳二委シ

明治二年「貸金利足帳」

明治十五年「貸金利足帳」

安政四年巳八月元金拾兩

利金壹兩貳式匁五分

利足金壹兩貳式匁五分

旬市場

一元金五兩三分式朱

秋山義方

一元金五兩三分式朱

秋山義方

銀式匁五分

銀式匁五分

右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月貳兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年已来無利足、文久二貸金帳二委シ

右者元金拾兩之内、藥礼内取残無利足証文有之候、返金不及云々十一年利足帳二委シ、内金五兩壹分取、但安政午七月壹兩壹分、同九月貳兩、未七月壹兩、元治元子三月廿三日壹兩取、未年已来無利足、文久二貸金帳二委シ

明治十八年八月廿日漢魏叢書一部右金ノ償卜

明治十六年「貸金利足帳」

シテ請取、依テ此帳取消、証書八十八年十一月九日秋山ニ返却

安政四年巳八月元金拾兩

月九日秋山ニ返却

利足金壹兩貳式匁五分

旬市場

史料12 「小島日記(明治十八乙酉日記)」

小島資料館

十九日陰且雨

一八王子宿秋山義方四男恭蔵来、義方事六月廿日・中症ニ而伏枕、少々八宜敷候得共老病旁心配、

同人事守政兄ニ是非共面談致度義有之二付相来杖被下度云々之旨申聞候二付、守政即日恭蔵同

道午後二時頃赴之泊ス、八蔵供也

廿日陰

一守政從八王子夕刻帰宅

廿一日晴

記

一漢魏叢書 八帙桐箱入

右者先年八王子秋山義方へ貸金有之候処、其後入金有之、残金今以返済無之候処、一昨日同人病

氣二而面会致度趣申来候二付罷出候処、右書籍八義方十四、五才之時其父ヨリ購求致呉候品二而既二十余年秘置、遠山雲如先生も希世之珍本ナリト称賛セラレシモノ二付、此レヲ右残金ノ代リ二引取呉候様懇二義方・談話有之二付、承知ノ旨及返答、右持参致申候、但シ秋山ノ子孫ハ勿論其他二而も右書ヲ一読致度旨申ス人有之候ハ、其節八借覽為致呉候様義方ヨリノ望ミナリ

右貸金ノ事八明治十七年以前歳々ノ貸金利足帳ニワ記シ有之

一 佐藤丹崖青緑山水 一幅
右八丹崖ノ顔ル精力ヲ用ヒシ珍幅ニ付永ク珍藏致シ呉候様申之、秋山ヨリ恵マル

一 清人西湖晁敬画山水 題詩アリ 一幅

右八曾テ遠山雲如先生ガ東京骨董店ニ於テ銭式百文ニテ購求恵マレシモノ二付、珍藏致呉候様申之、前同断秋山ヨリ恵マル、但詩画共ニ妙絶

一 遠山雲如先生詩稿 七冊

右八先生死後未亡人ガ秋山方ヘ持参致置モノ二付、未經上木ノ作文ケ活板ニ致シ知己ノモノエ贈リ呉候様秋山ヨリ贈ラル

右今般秋山義方老人ヨリ贈ラレシ者二付、為後日記置申候、義方通称嵯蔵、字某、号柘洲、八王子駅人、善医旁嗜詩、又愛書画、今年七十養

史料14 青木芳齋履歴書（「明治十七年七月より差出書類綴受書綴込」） 杉山寿一家（当館）

履歴書

神奈川県南多摩郡堺村相原四百一番地平民

医師 青木芳齋

天保三年十月十四日生

一 弘化元年一月ヨリ神奈川県南多摩郡八王子町秋山義方ニ従ヒ、嘉永五年八月迄八年八ヶ月間漢学及ヒ医学研究

一 嘉永五年九月ヨリ撰津国大阪ニ於テ内外科医緒方洪庵ニ従ヒ、安政五年九月迄六年一ヶ月間内外科医術及ヒ洋学研究

一 安政五年十一月ヨリ南多摩郡堺村相原四百一番地ニ於テ、明治廿二年五月迄三十年七ヶ月間内外科医術開業

右之通相違無之候也

右

明治廿二年五月廿日

青木芳齋

神奈川県知事冲守固殿

氏名	青木芳齋
出生年月日	天保三年十月十四日
住所番地	南多摩郡堺村相原四百一番地

明治廿一年度直接町村税納額	
地租額	戸別割計
金壹円貳拾五銭壹厘	金貳円拾五銭貳厘
明治 年 月 日以来	計 金三円四拾銭三厘
二年間町村税ヲ分担ス	有
明治 年 月 日以来	有
二年間地租ヲ納付ス	有
明治 年 月 日以来二年	有
間直接国税貳円以上ヲ納付ス	有

史料80 『明治金玉集』の出版延期広告(『武蔵野叢誌』第1号、明治16年10月7日より)

広告

大沼枕山 小菅香村 四先生批評 木村新之助編輯
 森 春濤 石川鴻齋
 一 明治金玉集 中本 全一冊

右八本月十五日出版ノ積リノ処、批評者ノ都合ニ依リテ更ニ十月十日ヲ期シ出版スヘシ、而シテ該集八今世現存名流大家ノ金編玉作ヲ輯メタルモノナレハ、全ク其名ニ背カサルノ一佳集ナリ、苟モ吟風弄月ノ君子ハ、明窗淨几ノ間ニ必ス一本ヲ備ヘ給ヘト云フ、爾カリ

明治十六年八月

府中駅

成文舎出版

史料82 『一滴千金憂世の涕淚』の広告(『自由新聞』明治17年4月5日)

英国エドワードキング原著

日本夢 柳居士演義

一滴つぎよのなみだ 憂世涕淚 日本綴定 価
 千金 全三冊 七拾五銭

右八昨春英京龍動ニテ出版セシ、エドワードキング氏著作セントルサヴェーヂト題セシ一篇ヲ夢柳居士ノ訳述補綴セシ者ニシテ、此ノ人間社会八百事万物悉ク邪悪ナリ、須ラク進ンデ改造スベシト云ヘルコトヲ大趣旨トシ、其間英雄烈女ノ伝記、才子美人ノ遇合等ヨリ、露国ノ虚無党、仏国ノ共産等ノ事情ヲ詳説細録シタル政治上ノ稗史小説ナリ、先キニ自由新聞ヨリ抜粹シ、猶居士ノ校訂増補ヲ経テ、日本出版会社ヨリ出版スルノ広告アリシトコロ、今回居士ニ乞ヒ来廿五日拙者方ヨリ出版ス、江湖諸君願クハ購読アレ

神奈川県北多摩郡府中駅

明治十七年三月

渡辺寿彦

史料124 高嶋活版部広告(『八王子明覧』より)

高嶋活版部

筆墨硯紙類書籍を以て老舗の名声高き全店に於ては、去る明治廿四年一月中より活版業を開始せしに、日尚ほ浅しと雖も、印刷の鮮明なると、価額の低廉なると、事業の迅速なるとを以て普く江湖の好評を博し、日に月に隆盛に趣き繁栄を極むるにより、猶一層業務の拡張を図り、今般印刷器械及活字数万を増加し、精練なる職工数名を増備し、旧倍の勉強を以て引札、帯紙、名刺請取用紙、諸帳簿用野紙、商標ペーパー、銀行会社の株券、定款、考課状、学校免状及規則、諸団會、諸組合事務所の規約、報告書、籍雜誌、其他苟しくも活版、銅版に関する印刷物は一切依頼に應ずと云ふ

史料138 『進歩鑑』第三号広告(明治23年10月1日発売)

本鏡定価

一冊三錢一ヶ月分六冊八拾六錢二ヶ月分十二冊三拾錢毎月六回発行候事

注意 八王子市外配送ノ分八一冊二付キ金五厘宛ノ郵税申請候

代価払込八武州八王子郵便局へ宛テ為換ヲ以テ振込マル、事

本紙広告料五号活字一行廿四字詰十行以下一回一行二付六錢、十行以上一行二付一回五錢五厘、二回以上八二割引前金ノ外八掲出仕ラス

予約印刷

神奈川各郡、町村、ちやうどのめい及大字役場位置一覽表今般購読諸志の需もとめに應じ五百部限り印刷発行候間望の諸士は来ル十月廿五日限り申込ありたし

実測図を附録

購読諸志の便利を量らんが為め神奈川各郡の実測を一郡宛出いだし此の図美好きれいに印刷して看客諸君に配布し高評を博するは近日にあり

史料141 『八王子織物新報』の広告(『染色雜誌』第36号、明治26年1月15日より)

八王子織物新報

毎月五ト九ノ日発行(月六回)

定価壹枚 金壹錢

一ヶ月郵税共 前金九錢

本誌は八王子織物商工業の機関として世に出てたり、故に我八王子織物の商工現状を知らんと欲せば、本誌を愛読すべし

本誌は毎月本誌大の織物生系等の市場価格、並に成行を詳記せる附録を添ふ、実に本業の指針なり

八王子町八日七十七番地

発行所

織物新報社

史料159 自由新聞広告料領収証(明治17年4月27日)

ウ九号

証

自由

一金八拾四錢也

青木氏病死ノ件

新聞

割印

四行三日間掲載

広告

料領 明治十七年四月廿七日

自由新聞社「印」

収証

武相銀行殿御中

扱人

シ 号

掲載日

お礼

企画展示「多摩の書物と刷物 19世紀の出版・印刷文化」は、町田市立図書館と当館(町田市立自由民権資料館)が共催で開催しましたが、報告集は、当館が編集・発行します。

展示会の開催にあたり、以下の市内外の史料所蔵家・機関にご協力をいただきました。また、調査にあたっては、所蔵機関の学芸担当者から貴重なご教示をいただきました。ありがとうございました。

青木晃氏(市川市) 青木貢氏(相原町) 井西一郎氏(稲城市) 薄井梅子氏(常盤町) 内野秀治氏(東大和市) 梅津敬氏(国立市) 太田伊三郎氏(多摩市) 草薙佐市氏(金井町) 小山晶氏(多摩市) 佐伯邦昭氏(多摩市) 櫻井孝三氏(調布市) 佐藤晃氏(小川) 佐藤正心氏(図師町) 新藤恵久氏(八王子市) 杉山寿一氏(小山町) 鈴木貢氏(稲城市) 寺沢茂世氏(多摩市) 野口正久氏(八王子市) 藤木久志氏(鎌倉市) 細野英雄氏(小川) 三橋国民氏(原町田) 村松貞枝氏(成瀬) 森俊勇氏(稲城市) 山下憲治氏(つくし野) 吉野泰平氏(三鷹市) 若林照雄氏(下小山田町) 若林宏宣氏(下小山田町) 渡辺晃一氏(府中市)

稲城市史編纂室 青梅市郷土博物館 国立国会図書館 小島資料館(町田市小野路町) 小平市中央図書館 JR東日本旅客会社新宿駅 多摩市史編さん室 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫 八王子市郷土資料館 八王子市立中央図書館 府中市郷土の森博物館 福生市郷土資料室 横浜開港資料館 早稲田大学図書館

企画展示の報告集である『民権ブックス』は通例、展示各史料の説明を収録しませんが、今回は「展示解説目録」を作成して観覧者に配布しませんでしたので、本ブックスにすべての史料説明を採録しました。また、重要と思われる史料のいくつかを、解説に続いて史料紹介しました。史料番号は、展示目録の掲載番号に対応しています。原史料に付された振り仮名は、必要と思われるものを除いて省略しました。史料の性格の差、史料の改ページについての表記が必要と判断したものは、点線を入れました。

展示各テーマの解説文、各史料の説明文の執筆、および史料紹介は自由民権資料館嘱託の鶴巻孝雄が担当しました。